



Title	日本の歳時記
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	2020-04-10
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/77423">http://hdl.handle.net/2115/77423</a>
Type	manuscript
Note	直筆草稿 183頁。
File Information	B013_01024759p687p902.pdf



[Instructions for use](#)

書名 朝鮮社会 (47)

原稿番号: # 687-705

号数: 9本

字詰: 字× 行× 段( )

改丁指定:

文撰氏名: 朝日 (箱分) 月 日

植字氏名: (頁<sup>ミダシ</sup>ナ) 月 日

担当





下

正月		元日	二日	三日	四日	五日	六日	七日
二月		初午	二日	八日	十五日	徳山亭		
三月		三日						
四月		十日	十四日	十五日	十六日	二十		
五月		朔日	四日	五日				
六月		上旬	十五日	二	甲	四日		
七月		朔日	七日	十日	十二日	十三日		

同里歳時記可載節日は左の通りである。

163

慶すしん望つて以前の後かしの新中行事の大  
 綱を以て考の中かき交りやうと思ふ。但しこ  
 り九代佐竹の時跡性も自かき存して居る。何か  
 の祝儀にゆりこころは七月の七夕の行事か六  
 日の行儀か。片の事や一月二日六日。薄毛  
 祖神の祭神の爲に城下甚く賑わふ事あり。然し  
 其の。延し二んが。跡性はモノがらつてある。  
 以上。致し方なき事あり。



何の日と云ふ類が多い。  
 の月日又は何月の上とか申すかの十二支申の  
 用いられし事あり。神代文の古一箇條ありは旧  
 日。其他の類ありしは神代文の行申しは  
 事あり。八十八社に厚申すといふ事は  
 彼し年中行事の正上は御尋の外には大しと行  
 事あり。地元のよつと道神  
 余り  
 用いられし事あり。神代文の古一箇條ありは旧  
 の月日又は何月の上とか申すかの十二支申の  
 何の日と云ふ類が多い。

165

又國書卷之八（五七九）田代の條に「半夏生に  
 限るとあり。又卷之九（六〇六）に三伏の條ありと行事  
 に「いゝは記事あり。其中先年同じしは本書  
 正八月以降を名いす。是れ  
 又民間の同時令に北條岸と節分夜撒豆の條を  
 二つ分てあり。學問者（春）に御尋、節分の外に  
 は朔旦冬至の記事あり可。  
 又民間の行事を小の類節の條に御尋と八十八  
 社と二百十日位しかたいか二の三の節日は  
 各地の百姓には志小の事ありぬあり。

下賤の輩は、いと尊ぶかしげに  
 應多しと休息し、二日、毒<sup>三</sup>り  
 多<sup>礼</sup>に去り。一、今日  
 六日、家に見世に戸をさし、  
 出入りはおく、同<sup>一</sup>に  
 一、今日、城下の警目せといふ  
 年終の頃、<sup>と</sup>家<sup>二</sup>に  
 鳥追とて、非人若菜<sup>三</sup>り  
 三、<sup>一</sup>

166

正月 元日 毎宗鶴鳴に若水を汲、  
 神棚の紐は供し、<sup>三</sup> 若菜<sup>二</sup>を  
 城下には、武宗にはかくのいとし、  
 いへとし、高坊民家は若菜<sup>三</sup>を  
 温<sup>一</sup>能<sup>二</sup>を<sup>三</sup>用<sup>四</sup>に、  
 中<sup>一</sup>は<sup>二</sup>精<sup>三</sup>也。一、  
 増すの事、今朝より始<sup>一</sup>とい<sup>二</sup>も  
 今朝より始<sup>一</sup>とい<sup>二</sup>も

下





~~二月~~ ~~初~~ ~~日~~ ~~下~~ ~~向~~ ~~三~~ ~~河~~ ~~高~~ ~~城~~ ~~東~~ ~~部~~  
~~と~~ ~~後~~ ~~二~~ ~~に~~ ~~あ~~ ~~ら~~ ~~ば~~ ~~毎~~ ~~年~~ ~~二~~ ~~月~~ ~~に~~ ~~あ~~ ~~ら~~ ~~ぶ~~  
~~八~~ ~~日~~ ~~今~~ ~~年~~ ~~の~~ ~~始~~ ~~と~~ ~~い~~ ~~は~~ ~~す~~ ~~一~~ ~~日~~ ~~万~~ ~~事~~ ~~一~~  
~~日~~ ~~に~~ ~~始~~ ~~り~~ ~~す~~  
~~三月~~ ~~三日~~ ~~上~~ ~~巳~~ ~~の~~ ~~祓~~ ~~儀~~ ~~と~~ ~~い~~ ~~は~~ ~~す~~ ~~宗~~ ~~廟~~ ~~に~~ ~~祭~~ ~~儀~~ ~~を~~ ~~行~~ ~~は~~ ~~し~~  
~~元~~ ~~慶~~ ~~順~~ ~~友~~ ~~に~~ ~~相~~ ~~贈~~ ~~祝~~ ~~承~~ ~~な~~ ~~り~~ ~~又~~ ~~二~~

168

~~二月~~ ~~初~~ ~~日~~ ~~下~~ ~~向~~ ~~三~~ ~~河~~ ~~高~~ ~~城~~ ~~東~~ ~~部~~  
~~正~~ ~~五~~ ~~月~~ ~~と~~ ~~す~~ ~~多~~ ~~月~~ ~~と~~ ~~五~~ ~~月~~ ~~九~~ ~~月~~ ~~は~~ ~~宗~~ ~~廟~~ ~~に~~ ~~祭~~ ~~儀~~ ~~を~~ ~~行~~ ~~は~~ ~~し~~  
~~式~~ ~~法~~ ~~務~~ ~~に~~ ~~寺~~ ~~社~~ ~~に~~ ~~儀~~ ~~式~~ ~~は~~ ~~月~~ ~~待~~ ~~日~~  
~~待~~ ~~と~~ ~~神~~ ~~佛~~ ~~を~~ ~~祭~~ ~~り~~ ~~打~~ ~~築~~ ~~の~~ ~~能~~ ~~事~~ ~~一~~ ~~日~~  
~~御~~ ~~年~~ ~~の~~ ~~日~~ ~~編~~ ~~修~~ ~~を~~ ~~行~~ ~~は~~ ~~す~~  
~~二~~ ~~月~~ ~~初~~ ~~日~~ ~~下~~ ~~向~~ ~~三~~ ~~河~~ ~~高~~ ~~城~~ ~~東~~ ~~部~~  
~~二~~ ~~十~~ ~~日~~ ~~惠~~ ~~比~~ ~~須~~ ~~乎~~ ~~と~~ ~~高~~ ~~宗~~ ~~に~~ ~~祀~~ ~~り~~ ~~也~~  
~~二~~ ~~十~~ ~~六~~ ~~日~~ ~~漢~~ ~~之~~ ~~祖~~ ~~神~~ ~~の~~ ~~祭~~ ~~儀~~ ~~を~~ ~~行~~ ~~は~~ ~~し~~ ~~大~~ ~~抵~~ ~~十~~ ~~三~~ ~~日~~  
~~日~~ ~~の~~ ~~廿~~ ~~七~~ ~~日~~ ~~に~~ ~~い~~ ~~は~~ ~~す~~ ~~其~~ ~~の~~ ~~城~~ ~~下~~ ~~其~~ ~~の~~  
~~心~~ ~~願~~ ~~い~~ ~~は~~ ~~し~~ ~~也~~  
~~又~~ ~~婦~~ ~~教~~ ~~の~~ ~~日~~ ~~也~~  
~~又~~ ~~婦~~ ~~教~~ ~~の~~ ~~日~~ ~~也~~  
~~又~~ ~~婦~~ ~~教~~ ~~の~~ ~~日~~ ~~也~~

700



六月 上旬 本行日所拜天正の御馬天王 御示あり。  
 中旬 二至、所にきて、の寺院にて修し、  
 或ははた御馬を御清せしめ、  
 一、一、又町内に御身て、後日おのうらな  
 りし念佛し、御養にまで、太才御御養身 敬三尊  
 在、結念珠、のことし、少年の御才大助  
 くらつて、高寺に念佛を唱へ、  
 心引あひ、一、一、御事、不定、一、所  
 限、に、了、申、な、る、其、日、一、所、終、日、御、馬、を  
 車とす一

704

下

十五日 城内三丸富士湯向の所を、十四  
 日、八、時、参詣多し  
 二十日 中、御養精進と、終日、別火、潔斎  
 末は、山、尾、を、見、ま、す、水、に、こ、し、  
 南河、御養、に、  
 し、  
 又、町、に、名、あ、り、の、寺、院  
 へ、  
 生、見、玉、  
 祝、儀、  
 親、  
 へ、子、の、方、を、酒、を、  
 又、  
 贈、  
 親、

170

書名 朝鮮社会 (68)

原稿番号: # 706-780

号数: 9本

字詰: 字× 行× 段( )

改丁指定:

文撰氏名: 朝日 (箱分) 月 日

植字氏名: (頁<sup>ミ</sup>ダシ) 月 日

担当

十七日 新田町 盆中生雨盛への供物(おひな)

新田町 盆中生雨盛への供物(おひな)

及 湯の御縁を以 柳に空置す

今 知より 下五日まで 近き山見上

夕 花屋出よ 夕夕八の時より 魚

と 二 菩提寺に 鐘響可を掃除し

燈籠(提燈) 提燈を 燃し 香花を 供ふ

2下

七月 初日 たる 六日 夕夕 五色の紙の色紙(紙短冊)

詩歌連俳 若竹の枝

さきけて 庭に高く 風に争ひ

十日 昨夜(昨夜) 今更 石原法水寺 観音

四方 六ヶ 日(夕) 観音に(夕) 誦(夕) 多し

夕 暮(薄暮) 後(夕) 下(夕) 可(夕) 者(夕) 以(夕) 香(夕) 湯(夕) 多(夕) し

湯(薄暮) 暮(夕) 後(夕) 下(夕) 可(夕) 者(夕) 以(夕) 香(夕) 湯(夕) 多(夕) し

時(夕) 有(夕) 基(夕) 礎(夕) 是(夕) 年(夕) 也(夕)

必(夕) 巳(夕) が(夕) 父(夕) 母(夕)

~~ことし~~  
~~大がた遊木~~  
~~事~~  
~~又~~  
~~王~~  
~~参詣~~  
~~事~~  
 十六日  
 午の墓所にて  
 盆供したる花  
 新に花水を午向  
 又十  
 といふ、八時より  
 墓所に参り  
 盆礼  
 親戚朋友  
 相賀し、又菩提  
 寺に  
 往て  
 加年、二水を  
 盆礼  
 をいへ、  
 盆掘んと  
 誦經念仏す。

2下

~~し~~  
~~弟~~  
~~檀~~  
~~幕~~  
 十四日  
 十  
 正  
 月外をさすかことし  
 早王より寺に参詣多し、一月毎家  
 夕雲前に飲食香花供し、又寺  
 午に檀家子僧一兩人共檀家  
 軒に提燈火燈籠  
 夜より下ふ  
 家  
 祖先の  
 霊魂  
 系格を  
 加ふ  
 意あり





十月	二十三日	二十四日	二十五日	二十六日	二十七日	二十八日	二十九日	三十日
今日より	今日より	今日より	今日より	今日より	今日より	今日より	今日より	今日より
...	...	...	...	...	...	...	...	...

2下

九月	十月	十一月	十二月	正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

712



廿五日 友集會  
 廿七日 親戚朋友  
 廿八日 贈物す  
 廿九日 又寺に詣りて  
 三十日 又寺に詣りて  
 三十一日 又寺に詣りて  
 一月十日 又寺に詣りて  
 一月二十日 又寺に詣りて  
 一月三十日 又寺に詣りて  
 二月十日 又寺に詣りて  
 二月二十日 又寺に詣りて  
 二月三十日 又寺に詣りて  
 三月十日 又寺に詣りて  
 三月二十日 又寺に詣りて  
 三月三十日 又寺に詣りて  
 四月十日 又寺に詣りて  
 四月二十日 又寺に詣りて  
 四月三十日 又寺に詣りて  
 五月十日 又寺に詣りて  
 五月二十日 又寺に詣りて  
 五月三十日 又寺に詣りて  
 六月十日 又寺に詣りて  
 六月二十日 又寺に詣りて  
 六月三十日 又寺に詣りて  
 七月十日 又寺に詣りて  
 七月二十日 又寺に詣りて  
 七月三十日 又寺に詣りて  
 八月十日 又寺に詣りて  
 八月二十日 又寺に詣りて  
 八月三十日 又寺に詣りて  
 九月十日 又寺に詣りて  
 九月二十日 又寺に詣りて  
 九月三十日 又寺に詣りて  
 十月十日 又寺に詣りて  
 十月二十日 又寺に詣りて  
 十月三十日 又寺に詣りて  
 十一月十日 又寺に詣りて  
 十一月二十日 又寺に詣りて  
 十一月三十日 又寺に詣りて  
 十二月十日 又寺に詣りて  
 十二月二十日 又寺に詣りて  
 十二月三十日 又寺に詣りて

廿五日 友集會  
 廿七日 親戚朋友  
 廿八日 贈物す  
 廿九日 又寺に詣りて  
 三十日 又寺に詣りて  
 三十一日 又寺に詣りて  
 一月十日 又寺に詣りて  
 一月二十日 又寺に詣りて  
 一月三十日 又寺に詣りて  
 二月十日 又寺に詣りて  
 二月二十日 又寺に詣りて  
 二月三十日 又寺に詣りて  
 三月十日 又寺に詣りて  
 三月二十日 又寺に詣りて  
 三月三十日 又寺に詣りて  
 四月十日 又寺に詣りて  
 四月二十日 又寺に詣りて  
 四月三十日 又寺に詣りて  
 五月十日 又寺に詣りて  
 五月二十日 又寺に詣りて  
 五月三十日 又寺に詣りて  
 六月十日 又寺に詣りて  
 六月二十日 又寺に詣りて  
 六月三十日 又寺に詣りて  
 七月十日 又寺に詣りて  
 七月二十日 又寺に詣りて  
 七月三十日 又寺に詣りて  
 八月十日 又寺に詣りて  
 八月二十日 又寺に詣りて  
 八月三十日 又寺に詣りて  
 九月十日 又寺に詣りて  
 九月二十日 又寺に詣りて  
 九月三十日 又寺に詣りて  
 十月十日 又寺に詣りて  
 十月二十日 又寺に詣りて  
 十月三十日 又寺に詣りて  
 十一月十日 又寺に詣りて  
 十一月二十日 又寺に詣りて  
 十一月三十日 又寺に詣りて  
 十二月十日 又寺に詣りて  
 十二月二十日 又寺に詣りて  
 十二月三十日 又寺に詣りて

厄を祓つておぼつかし  
 来れり乞馬人にとすあり  
 紙往しけり甚おぼつかし  
 又厄辛に 厄先の人  
 かしめ 野目多と  
 りおぼつかし 中にさうし  
 入、祈にうつれ、福福は  
 高高いから  
 厄先の人に 厄先の人  
 紙往しけり甚おぼつかし  
 又厄辛に 厄先の人  
 かしめ 野目多と  
 りおぼつかし 中にさうし  
 入、祈にうつれ、福福は

然然某  
 命は常若心に思て  
 今宵候備豆を打率、およくあること  
 今夜宗備の夜を守ると寝す  
 晩晩食食 俗算より盛鏡を  
 相向相といひ、相先先の魂を  
 注連注繩繩をかき、二丸をうき  
 注連注繩繩をかき、二丸をうき  
 相向相といひ、相先先の魂を



本文のIP落す

80

(日本標準規格B列5判)

輿論図彙図本

80

国立国会図書館

編者記 ① 本稿は草稿段階のものであり、当初はそれぞれ

独立した論文としてあつかわれるを得ず、系統的に整理し

得ないものも考えこいた。ところが以下に掲載メモが出て

目次のことによって、調査以前に7年中行事の社会学

的研究の主題として、左に示すような構想を持って

あり、多くが未完のまま最終のものとして解するに改

たので掲載する。

1970

(日本標準規格B列5判)

129

G 生活の更新 (決算期の意義: 大坂、~~会~~、会計年、ボーナス、学期学年、大洞契、去等) (ツレの決算、市日)

年中行事の社会学的研究の主題

一 年中行事の共同圏

(文化圏決定の標識となる)

a 地域的 (文化圏の内題)

b 階級的 (家をもつて生活単位とするところでは)

c 職域的 (年令別・性別の分化は内題とならぬ)

d 年令的

e 性別的

一 年中行事の存在理由 (制な慣行は年中行事によって更新される)

a 伝統の更新

b 集団の更新 (同族、郷土人)

c 社交の更新 (贈答の意義)

d 休養娯楽 (体力更新)

e 時食と栄養

f 信仰生活 (神や祖先との社交更新)

一 日本・朝鮮・中国における比較

(節日、娯楽、脚戯、綱引、ガラソコ)

祝祭・神事・家庭的・村落的

一 年中行事の集団性

180

90

一 時間的觀察

●a 十代に一回 (大嘗祭) ~~神嘗祭~~

b 年に一回 (神宮式年祭)

c 随時 (祈雨祭、落成式)

d 毎月反覆 (朔望祭)

e 毎日反覆 (朝夕奠)

一 年中行事の概略  
算帳、勘定、決算



a 日本 | 正月と盆

b 朝鮮 | 大洞契、大晦日

c 中国 | 年関、端午節、中秋節

一 襖被

一 年賀

一 贈答

一 知人結合更新

a 日本 | 正月 (屠蘇) 盆 (忘年) 臘 (八) 湯 (卍)

b 朝鮮 | 旧歲拜、新歲拜

c 中国

181



一 郷土交際遊樂

a 日本 — 氏神祭、寒風山ササナリ、

彼岸百万遍、寺院 (七月三十一日)

十月六日、十一月二日

b 朝鮮 — 山神、秋典、端午、秋夕、

造鋤遊 (朝鮮には郷土祭事は之

トカ、郷土遊樂はあり)

c 中国 — 神、角力、鞦韆、娘々祭、

土地神祭、荆苙 (九月九日)

一 親族結合の更新

a 日本 — 婦家に年賀、正月と盆、生

見玉、親へ酒食を贈る。

b 朝鮮 — 時祭、新旧歳拜、路上の会

見 (八月)。

一 奴婢解放

一 休養 (生業休止、市日)

一 家族結合の強化

下占、呪術、月祭、星祭、太陽祭、月

祭、竈祭、宅神祭、先祖祭、歳華

朝鮮にはト占の日が甚だ多し朝

鮮は家庭祭りと同族祭り。

182

一 郷土祭事

氏神・土地神・娘々祭、山神祭、秋典

寺院・朝鮮の虫切祭?

一 子供等の日

子供への注意の更新

一 老人等の日

老人への注意の更新

一 女の日

荆苙(七月七日)、元宵節(満州)

一 町會保健家事

a 菖蒲湯・清掃・薬製造・虫干

b 流頭・壁ぬり日

一 集団更新

秋典・祝祭(時享)・新歳拜

一 年占

一 農耕の時

農の重要時期の指示  二月九日植樹日

二月の驚蟄日は壁ぬり日・山の口あり

穀雨の日(満州)、八十人夜、二百十日

彼岸

583

書名 朝鮮社会 (49)

原稿番号：# 731-749

号数： 9本

字詰： 字× 行× 段( )

改丁指定： 24p

文撰氏名： 朝日 (箱分) 月 日

植字氏名： (頁<sup>ミダシ</sup>ナ) 月 日

担当

22頁

3T

北海道 瑞興郡 月瀬里部落 (草稿)

農村社会調査野帳抜書

下

三下

(日本標準規格B列5判)

731

国立国会図書館

P.

の 田 圃 白 米 産 出 量 休 業 して 酒 宴 を ほ り 牛 糞 を 取  
 り 出 した 日 九 月 九 日 ( 十 月 二 十 日 ) の 産 出 量  
 や かな 行 事 未 だ 未 だ 休 業 中 と して は 五 斗 六  
 ル 物 長 い 暇 未 だ 未 だ 五 斗 六 日 産 出 量  
 田 圃 の と こ り び 除 草 後 収 穫 量 の 自  
 の も 未 だ 未 だ 田 圃 の と こ り び 五 斗 六 日 産 出 量  
 田 圃 の と こ り び 盛 夏 の 頃 の 産 出 量 の 自  
 田 圃 の と こ り び 盛 夏 の 頃 の 産 出 量 の 自  
 田 圃 の と こ り び 盛 夏 の 頃 の 産 出 量 の 自  
 田 圃 の と こ り び 盛 夏 の 頃 の 産 出 量 の 自  
 田 圃 の と こ り び 盛 夏 の 頃 の 産 出 量 の 自



SST

SST



感状は官舎からよ... 無償交付すること

高家邑定城地... 又は昔出時に金... や物やその力で... 贈り物をする...

コジロウ... コンケルと... 困る家の... 有力者が家を建て... 部落の地区である...

組合に返す事になくて... は二年で仔牛一頭を... 牛が老衰した時... 組合に返す事になくて...

のも時向をとり仕事である。ピニテトクを作  
 るには炭火で庭で作る。手伝いに来り御馳走  
 を食ひたり遊んたりする。中には余分に果  
 実を。鶏も何羽か殺さぬ。薬酒も作られる。  
 部落外の者は来ない。

困る家々のために近隣数戸の小少百少を行な場合  
 はよくある。コ少百少は漢字では拳底と書く  
 のであらう。康本氏の説である。底は元の意  
 元は情に通ずるといふのである。  
 4  
 結婚式の時の援助  
 結婚式の時には部落の人ばかりの者ばかり  
 手伝いに来る。御馳走の準備をする。女は夜  
 か、夜昼をなく、御馳走の準備をする。女は夜  
 類の準備、男が御馳走を作る。栗の皮をむく

七才以後にたつてかゝつた。結婚して五  
 年間は新婚はどよ一帯七戸外に出る事にな  
 りな。かゝつた。昔は身や財力の豊かた家  
 ばかりで、結婚年次は極高の間に  
 男は二十才前に結婚した。然し極高の間に  
 二十才を過ぎて結婚した。故に一級に  
 高班の間に男はかたは二十才前後に結婚  
 した。かゝつた。かゝつた。かゝつた。

結婚年次  
 一、結婚年次  
 二、結婚年次  
 三、結婚年次  
 四、結婚年次  
 五、結婚年次  
 六、結婚年次  
 七、結婚年次  
 八、結婚年次  
 九、結婚年次  
 十、結婚年次

十七八位に結婚した。然し十二才で結婚  
 して三四年間は高上の夫婿同様に余るな  
 かつた。結婚年次は三四年間同様に若  
 夫婿は言葉も交わらな。場合が多か  
 りな。老人は十才の時に十九才の妻を迎  
 へた。直接に口を交わした。は一年後に  
 結婚した。昔は結婚は産物のはよりの  
 結婚年次は極高の間に男はかたは二十才前後に結婚  
 した。かゝつた。かゝつた。かゝつた。

結婚年次  
 一、結婚年次  
 二、結婚年次  
 三、結婚年次  
 四、結婚年次  
 五、結婚年次  
 六、結婚年次  
 七、結婚年次  
 八、結婚年次  
 九、結婚年次  
 十、結婚年次



母 貞 四 十 五 歳  
年 次

これいかに

以上の子は、~~朝鮮に~~ ~~移り~~、~~お~~ ~~出~~ ~~産~~ ~~率~~ ~~の~~ ~~下~~ ~~に~~ ~~相~~ ~~違~~ ~~な~~ ~~い~~。 ~~そ~~ ~~の~~ ~~故~~ ~~に~~

十数年前結婚年 ~~今~~ ~~か~~ ~~上~~ ~~界~~ ~~レ~~ ~~始~~ ~~め~~ ~~の~~ ~~頃~~ ~~一~~ ~~時~~ ~~出~~ ~~産~~ ~~率~~ ~~が~~ ~~下~~ ~~に~~ ~~相~~ ~~違~~ ~~な~~ ~~い~~。 ~~そ~~ ~~の~~ ~~故~~ ~~に~~

固定した年 ~~か~~ ~~上~~ ~~界~~ ~~レ~~ ~~始~~ ~~め~~ ~~の~~ ~~頃~~ ~~一~~ ~~時~~ ~~出~~ ~~産~~ ~~率~~ ~~が~~ ~~下~~ ~~に~~ ~~相~~ ~~違~~ ~~な~~ ~~い~~。 ~~そ~~ ~~の~~ ~~故~~ ~~に~~

あるに ~~出~~ ~~産~~ ~~率~~ ~~の~~ ~~下~~ ~~に~~ ~~相~~ ~~違~~ ~~な~~ ~~い~~。 ~~そ~~ ~~の~~ ~~故~~ ~~に~~

産し ~~出~~ ~~産~~ ~~率~~ ~~の~~ ~~下~~ ~~に~~ ~~相~~ ~~違~~ ~~な~~ ~~い~~。 ~~そ~~ ~~の~~ ~~故~~ ~~に~~

と ~~出~~ ~~産~~ ~~率~~ ~~の~~ ~~下~~ ~~に~~ ~~相~~ ~~違~~ ~~な~~ ~~い~~。 ~~そ~~ ~~の~~ ~~故~~ ~~に~~

十数年前 ~~出~~ ~~産~~ ~~率~~ ~~の~~ ~~下~~ ~~に~~ ~~相~~ ~~違~~ ~~な~~ ~~い~~。 ~~そ~~ ~~の~~ ~~故~~ ~~に~~

と ~~出~~ ~~産~~ ~~率~~ ~~の~~ ~~下~~ ~~に~~ ~~相~~ ~~違~~ ~~な~~ ~~い~~。 ~~そ~~ ~~の~~ ~~故~~ ~~に~~

東

た ~~自~~ ~~分~~ ~~か~~ ~~な~~ ~~り~~ ~~お~~ ~~婆~~ ~~さ~~ ~~ん~~ ~~に~~ ~~な~~ ~~っ~~ ~~て~~ ~~し~~ ~~ま~~ ~~い~~ ~~ま~~ ~~し~~ ~~た~~ ~~の~~ ~~で~~ ~~、~~ ~~こ~~ ~~れ~~ ~~は~~ ~~い~~ ~~か~~ ~~ん~~ ~~と~~ ~~思~~ ~~っ~~ ~~て~~ ~~離~~ ~~縁~~ ~~こ~~ ~~て~~ ~~し~~ ~~ま~~ ~~い~~ ~~ま~~ ~~し~~ ~~た~~ ~~。~~

酒宴の席 ~~あ~~ ~~る~~ ~~酒~~ ~~宴~~ ~~の~~ ~~席~~ ~~で~~ ~~事~~ ~~も~~ ~~な~~ ~~け~~ ~~に~~ ~~い~~ ~~っ~~ ~~て~~ ~~自~~ ~~分~~ ~~か~~ ~~な~~ ~~り~~ ~~お~~ ~~婆~~ ~~さ~~ ~~ん~~ ~~に~~ ~~な~~ ~~っ~~ ~~て~~ ~~し~~ ~~ま~~ ~~い~~ ~~ま~~ ~~し~~ ~~た~~ ~~の~~ ~~で~~ ~~、~~ ~~こ~~ ~~れ~~ ~~は~~ ~~い~~ ~~か~~ ~~ん~~ ~~と~~ ~~思~~ ~~っ~~ ~~て~~ ~~離~~ ~~縁~~ ~~こ~~ ~~て~~ ~~し~~ ~~ま~~ ~~い~~ ~~ま~~ ~~し~~ ~~た~~ ~~。~~

最近 ~~あ~~ ~~る~~ ~~酒~~ ~~宴~~ ~~の~~ ~~席~~ ~~で~~ ~~事~~ ~~も~~ ~~な~~ ~~け~~ ~~に~~ ~~い~~ ~~っ~~ ~~て~~ ~~自~~ ~~分~~ ~~か~~ ~~な~~ ~~り~~ ~~お~~ ~~婆~~ ~~さ~~ ~~ん~~ ~~に~~ ~~な~~ ~~っ~~ ~~て~~ ~~し~~ ~~ま~~ ~~い~~ ~~ま~~ ~~し~~ ~~た~~ ~~の~~ ~~で~~ ~~、~~ ~~こ~~ ~~れ~~ ~~は~~ ~~い~~ ~~か~~ ~~ん~~ ~~と~~ ~~思~~ ~~っ~~ ~~て~~ ~~離~~ ~~縁~~ ~~こ~~ ~~て~~ ~~し~~ ~~ま~~ ~~い~~ ~~ま~~ ~~し~~ ~~た~~ ~~。~~

満二年 ~~あ~~ ~~る~~ ~~酒~~ ~~宴~~ ~~の~~ ~~席~~ ~~で~~ ~~事~~ ~~も~~ ~~な~~ ~~け~~ ~~に~~ ~~い~~ ~~っ~~ ~~て~~ ~~自~~ ~~分~~ ~~か~~ ~~な~~ ~~り~~ ~~お~~ ~~婆~~ ~~さ~~ ~~ん~~ ~~に~~ ~~な~~ ~~っ~~ ~~て~~ ~~し~~ ~~ま~~ ~~い~~ ~~ま~~ ~~し~~ ~~た~~ ~~の~~ ~~で~~ ~~、~~ ~~こ~~ ~~れ~~ ~~は~~ ~~い~~ ~~か~~ ~~ん~~ ~~と~~ ~~思~~ ~~っ~~ ~~て~~ ~~離~~ ~~縁~~ ~~こ~~ ~~て~~ ~~し~~ ~~ま~~ ~~い~~ ~~ま~~ ~~し~~ ~~た~~ ~~。~~

微 ~~あ~~ ~~る~~ ~~酒~~ ~~宴~~ ~~の~~ ~~席~~ ~~で~~ ~~事~~ ~~も~~ ~~な~~ ~~け~~ ~~に~~ ~~い~~ ~~っ~~ ~~て~~ ~~自~~ ~~分~~ ~~か~~ ~~な~~ ~~り~~ ~~お~~ ~~婆~~ ~~さ~~ ~~ん~~ ~~に~~ ~~な~~ ~~っ~~ ~~て~~ ~~し~~ ~~ま~~ ~~い~~ ~~ま~~ ~~し~~ ~~た~~ ~~の~~ ~~で~~ ~~、~~ ~~こ~~ ~~れ~~ ~~は~~ ~~い~~ ~~か~~ ~~ん~~ ~~と~~ ~~思~~ ~~っ~~ ~~て~~ ~~離~~ ~~縁~~ ~~こ~~ ~~て~~ ~~し~~ ~~ま~~ ~~い~~ ~~ま~~ ~~し~~ ~~た~~ ~~。~~

若 ~~あ~~ ~~る~~ ~~酒~~ ~~宴~~ ~~の~~ ~~席~~ ~~で~~ ~~事~~ ~~も~~ ~~な~~ ~~け~~ ~~に~~ ~~い~~ ~~っ~~ ~~て~~ ~~自~~ ~~分~~ ~~か~~ ~~な~~ ~~り~~ ~~お~~ ~~婆~~ ~~さ~~ ~~ん~~ ~~に~~ ~~な~~ ~~っ~~ ~~て~~ ~~し~~ ~~ま~~ ~~い~~ ~~ま~~ ~~し~~ ~~た~~ ~~の~~ ~~で~~ ~~、~~ ~~こ~~ ~~れ~~ ~~は~~ ~~い~~ ~~か~~ ~~ん~~ ~~と~~ ~~思~~ ~~っ~~ ~~て~~ ~~離~~ ~~縁~~ ~~こ~~ ~~て~~ ~~し~~ ~~ま~~ ~~い~~ ~~ま~~ ~~し~~ ~~た~~ ~~。~~

親に反して肌裏中に子を産む事ほど、前に  
 罪を犯す事があったか、其子は聖書を讀し、  
 階級をいふ事をする。然し、常長に於いては  
 全く同じ事がある。此れは、恐らく、百々信也  
 及び、西州階級に於いては、四層階級は、銘  
 表の同じ事である。此の事は、何か、  
 現在に於いては、聖書を教える。故に、考へ、  
 此の形を、  
 七人、  
 ...

2  
 聖書  
 89

鮮的にかへは、結婚年齢の上昇は、その事か  
 りや、明確には統計の現況からいふことが、又  
 ...

両階はしつあつた。今あるものは三十年ばかり  
 前か、そのころに結婚した。事を知ると之は概して  
 である。  
 結婚に於ける男女の人口増加率より推算し  
 二階をトする場合、女子の結婚率の変化は元  
 来考慮に入るべき事と云ふべきである。

前妻が死すれば其喪中には縁談がある。  
 中には合符する子もない。後妻の場合には前妻が  
 死して間もなく後妻と迎ふ。昔から妻を  
 七くした男には区い結婚をする、のよ考へるは  
 一般的であつた。  
 女子が夫を亡くした場合には、昔は心算  
 結婚し、そのか一般の連つてあつた。現在  
 といふ階級には、夫の死後少くとも二三  
 年間は結婚しない。昔は二十才の若さでいふ



のあ  
 際計にしろ合々。昔は金を用ひぬ。意は  
 産後一般に一週間は安静す。

乳知見の疾病牛乳

昔は現在より乳知見の死は多かつた。昔  
 は乳知見の病気に薬をうすす。

く、全く同様の病に五才位  
 は人同様の病に入る。

在るは合々者ば直接南業医に行き、病  
 音は乳知見の病にうすす。

乳かよく出る場合には三神に祈る。

母乳の出ぬ場合には他の婦人の乳を飲む。

母乳の代用として、はりの牛乳、魚湯、粥で  
 育す。米又は粟を信精とする。乳の代用とし  
 てはこれを用ひす。乳かよく出る食物として  
 は、肉と昔に醬油也

朝鮮社会 (50)

750~768









自身はまた起すられぬか子、  
 三神は御房の一階に祀り、飯三杯おさし茶  
 三杯に、お水に湯(湯は布を丸に計)丸三杯供  
 けり。これは子供お水お三日目に合行  
 けり。新よりはお婆さん(姉)下り。お婆  
 自身はまた起すられぬか子、  
 三神は御房の一階に祀り、飯三杯おさし茶  
 三杯に、お水に湯(湯は布を丸に計)丸三杯供  
 けり。これは子供お水お三日目に合行  
 けり。新よりはお婆さん(姉)下り。お婆  
 自身はまた起すられぬか子、

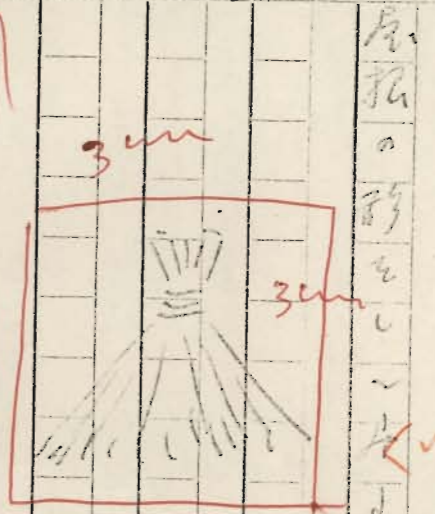
自身はまた起すられぬか子、  
 三神は御房の一階に祀り、飯三杯おさし茶  
 三杯に、お水に湯(湯は布を丸に計)丸三杯供  
 けり。これは子供お水お三日目に合行  
 けり。新よりはお婆さん(姉)下り。お婆  
 自身はまた起すられぬか子、  
 三神は御房の一階に祀り、飯三杯おさし茶  
 三杯に、お水に湯(湯は布を丸に計)丸三杯供  
 けり。これは子供お水お三日目に合行  
 けり。新よりはお婆さん(姉)下り。お婆  
 自身はまた起すられぬか子、

婦人の信仰

89

心 祖女に同じい。その言に依つてどこかの山に  
 築し子か生れよと。その子か夫夫と百つ  
 得た。其の祖女は務む事はなつ。  
 一般に言ふ。清い水は井戸の水である。子  
 七星は内房の一隅に餅か餅か清い水も供  
 祀す。ナモ得ない婦人が自身に祀すの如  
 の棟に之の言、此をいふ。其の言。祀すの  
 言はし。言ふ。  
 ソン~~クジ~~二仙家の構成の時祀す。その後家  
 の棟に之の言、此をいふ。其の言。祀すの  
 言はし。言ふ。  
 七星は内房の一隅に餅か餅か清い水も供  
 祀す。ナモ得ない婦人が自身に祀すの如  
 の棟に之の言、此をいふ。其の言。祀すの  
 言はし。言ふ。  
 ソン~~クジ~~二仙家の構成の時祀す。その後家  
 の棟に之の言、此をいふ。其の言。祀すの  
 言はし。言ふ。  
 一般に言ふ。清い水は井戸の水である。子  
 得た。其の祖女は務む事はなつ。  
 築し子か生れよと。その子か夫夫と百つ

心 祖女に同じい。その言に依つてどこかの山に  
 築し子か生れよと。その子か夫夫と百つ  
 得た。其の祖女は務む事はなつ。  
 一般に言ふ。清い水は井戸の水である。子  
 七星は内房の一隅に餅か餅か清い水も供  
 祀す。ナモ得ない婦人が自身に祀すの如  
 の棟に之の言、此をいふ。其の言。祀すの  
 言はし。言ふ。  
 ソン~~クジ~~二仙家の構成の時祀す。その後家  
 の棟に之の言、此をいふ。其の言。祀すの  
 言はし。言ふ。  
 七星は内房の一隅に餅か餅か清い水も供  
 祀す。ナモ得ない婦人が自身に祀すの如  
 の棟に之の言、此をいふ。其の言。祀すの  
 言はし。言ふ。  
 ソン~~クジ~~二仙家の構成の時祀す。その後家  
 の棟に之の言、此をいふ。其の言。祀すの  
 言はし。言ふ。  
 一般に言ふ。清い水は井戸の水である。子  
 得た。其の祖女は務む事はなつ。  
 築し子か生れよと。その子か夫夫と百つ



朝鮮正は危婦  
 南精白茶はよく  
 いふ名所はよく

流一花の恐れやふふと動作  
 精進心ついで考へて場を不習い  
 此の心はふふと知る水に流る  
 五ヶ月前上の産婦は機織りな  
 取入れかきとて高くと二に手  
 事もまきとてかきとてかきとて  
 この世には昔かきとて新依に  
 かつまはは田の仕事を伴  
 中いふふふふふふふふふふ

70  
 71  
 72  
 73  
 74  
 75  
 76  
 77  
 78  
 79  
 80

どの所か心とて子と高き事な  
 師い子の場合はいふ言ひ  
 の母不病つては文とてり  
 人々よ。或は高き如き器は  
 子と高き如き新依の如き  
 即ち薬水の鬼神に付てあ  
 いしやに新よのし子と高  
 子と高き如き新依の如き

やつん。貧しい家は二三男の子居る。  
 全部の金を手に入れた。財産の半分は親が  
 取る。おさいの家は甚だ男共多し。父母の老  
 同様にしておく。分は財産が揃った人。此  
 さまの家が。財産を半分は大体男が  
 取る。おさいの家は甚だ男共多し。父母の老  
 同様にしておく。分は財産が揃った人。此  
 さまの家が。財産を半分は大体男が  
 取る。おさいの家は甚だ男共多し。父母の老

婦人の喫煙飲酒  
 四十才以上の婦人で未婚の人になつて居る者  
 は、飲酒して世人はとめぬ。喫煙も同様  
 である。四十以下で飲酒したり喫煙する者は  
 遊女位である。四五十才の婦人で煙草を常用  
 して居る者は一類の女子は嗜好するが  
 のとて居る。



の居伝  
 大抵は、オントルの二間と厨房の  
 二間の間に障子の通路  
 がある。食卓は、  
 室を用い、他は倉庫兼  
 作業場である。やや富みたる者は二心を家所  
 に用い、  
 四壁を紙で貼る。障子は種  
 々な柄の紙を用い、糸立のぬりかゝるものもある。床は  
 油紙を用い、  
 モンソク(葉を植つたもの)、アンパラ(草の類で作)

ナムル(葉も使う)、ネンイ(葉と根を用い)、タル  
 ネ(根)、セリ(葉)、トラダ(根)、スク(葉)、  
 トトリの實(ムクには作つて食す)、メ(根)等である。  
 米豆合、とムクは代用食として、  
 菓子として用ひ、  
 普通以下、  
 月喰に一回は作つて食す。今は作らぬ。材  
 料はキコである。

↑  
≠

P.

である、<sup>イ草</sup>チキキ(ワニガム)で作られたものである。  
 毎年一回とりかかるといふ。チキキは  
 極貧の地で、アンパラの<sup>カニ</sup>の<sup>カニ</sup>、モンソクは  
 家で用<sup>カ</sup>。富んだ家ではモンソクの上  
 にチキキを敷<sup>カ</sup>りてある。  
 寝具は薄い<sup>ふん</sup>である。敷<sup>カ</sup>フトンは用<sup>カ</sup>す  
 。寝衣なし。服装としてはこの<sup>カ</sup>はチマか短  
 かい。<sup>カ</sup>は白製、<sup>カ</sup>  
 織<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>も白製である。針<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>チ  
 購入するとい<sup>カ</sup>。

↑  
≠

イ草



書名 朝鮮社会 (51)

原稿番号：# 769 ~ 780

号数：

9本

字詰：            字×            行×            段 (      )

改丁指定：

改訂

文撰氏名：朝日 ( 箱 分 ) 月 日

植字氏名： ( 頁<sup>ヘミダシ</sup> ) 月 日

担当

朝鮮北部および西部の共同作業

郷徒

5下

附近

(舊地位と  
公署の境  
春)

郷土軍

I 明洞の共同作業 とく 郷徒と附近、附帯役員

ここに昔からツレはない。アマシもたま

にありか余り多くない。農耕期には雇人夫を

入れよ。此法では三倉倉庫に二倍銀一日五円

位ありよ。洞内は隣洞から寺のあり

人雇人を雇うのである。昨年より学校児童動

員、遊楽人動員がある。農事を切りたので大

分ゆかた

共同作業班は各区の理事長の指揮による

盛んにやるといふ。耕地を平均して尺を

P. /

P.

あろうか、あと二倍銀の量をすよ事はない

。広い耕地の家も狭い耕地の家も不平等は

ぬ。男女老若皆出で働いて尺を

無償銀券を奉仕の慣行的制をとし、御徒と

附近かき。御徒は四祭の時に一洞の各戸が

奉仕に出る制度である。奉仕は水と米では

酒を飲まして厚く返す。十歳以下の幼童は

大人と踏合には御徒は行水不附近でや

ブグンは今より一歩の核印で、受けとる者は

此に~~取~~い~~く~~、~~何~~事し~~ない~~。郷徒は酒食を供す  
 る事によ~~り~~て~~我~~の~~謝~~恩の意か~~た~~た~~て~~茶~~を~~飲~~む~~。  
 近~~は~~原則的には、病人を~~困~~ら~~せ~~る~~事~~の~~た~~た~~か~~ら~~ず~~に  
 洞~~の~~地位か~~全~~洞民を~~救~~い~~て~~除~~業~~を~~し~~、  
 や~~り~~事~~に~~あ~~る~~。ポ~~グ~~ンは今日も~~も~~行~~は~~れ~~る~~所~~に~~  
 だ。家の新築の時~~に~~は~~レ~~ポ~~グ~~ンを~~行~~か~~す~~。ポ  
 グ~~ン~~は一洞金戸出~~の~~場合も~~あ~~り、又~~村~~に~~近~~縁  
 な~~り~~、~~人~~が~~行~~か~~る~~場合も~~あ~~る。宋の建築、病人の  
 時~~に~~、~~そ~~の~~他~~何~~の~~困~~り~~の~~時~~に~~行~~か~~す~~。規模は~~棟~~  
 比~~し~~て~~あ~~る~~か~~、~~高~~大規模の時は~~尊~~位~~を~~奉~~じ~~、公  
 員~~も~~、~~実~~際~~に~~指揮を~~す~~。近~~は~~同族とは~~関~~係  
 深~~い~~か、~~近~~くに~~住~~ん~~で~~居~~る~~は~~同~~族~~か~~近~~縁~~を  
 行~~か~~る~~場~~合~~も~~あ~~る~~。  
 本来~~近~~縁とは~~部~~落~~と~~改~~め~~て~~呼~~ぶ~~事~~に~~あ~~る。之~~も~~  
 之~~を~~こ~~の~~ほ~~と~~洞と改~~め~~て~~呼~~ぶ~~事~~に~~あ~~る。ポ  
 グ~~ン~~は~~山~~か~~ら~~い~~て~~又~~村~~會~~と~~し~~て~~、~~今~~も~~洞~~民と  
 之~~の~~下~~に~~公~~員~~か~~ら~~い~~て~~。明~~の~~郡一~~概~~に~~大~~体~~同~~じ  
 概~~して~~あ~~る~~。  
 下~~等~~而~~明~~の洞の中~~に~~は~~七~~他~~の~~部~~落~~即~~ち~~近~~縁~~  
 か~~ら~~い~~て~~茶~~を~~飲~~む~~。之~~も~~茶~~の~~附~~近~~北~~新~~洞と~~呼~~ぶ~~事~~は

此に~~取~~い~~く~~、~~何~~事し~~ない~~。郷徒は酒食を供す  
 る事によ~~り~~て~~我~~の~~謝~~恩の意か~~た~~た~~て~~茶~~を~~飲~~む~~。  
 近~~は~~原則的には、病人を~~困~~ら~~せ~~る~~事~~の~~た~~た~~か~~ら~~ず~~に  
 洞~~の~~地位か~~全~~洞民を~~救~~い~~て~~除~~業~~を~~し~~、  
 や~~り~~事~~に~~あ~~る~~。ポ~~グ~~ンは今日も~~も~~行~~は~~れ~~る~~所~~に~~  
 だ。家の新築の時~~に~~は~~レ~~ポ~~グ~~ンを~~行~~か~~す~~。ポ  
 グ~~ン~~は一洞金戸出~~の~~場合も~~あ~~り、又~~村~~に~~近~~縁  
 な~~り~~、~~人~~が~~行~~か~~る~~場合も~~あ~~る。宋の建築、病人の  
 時~~に~~、~~そ~~の~~他~~何~~の~~困~~り~~の~~時~~に~~行~~か~~す~~。規模は~~棟~~  
 比~~し~~て~~あ~~る~~か~~、~~高~~大規模の時は~~尊~~位~~を~~奉~~じ~~、公  
 員~~も~~、~~実~~際~~に~~指揮を~~す~~。近~~は~~同族とは~~関~~係  
 深~~い~~か、~~近~~くに~~住~~ん~~で~~居~~る~~は~~同~~族~~か~~近~~縁~~を  
 行~~か~~る~~場~~合~~も~~あ~~る~~。  
 本来~~近~~縁とは~~部~~落~~と~~改~~め~~て~~呼~~ぶ~~事~~に~~あ~~る。之~~も~~  
 之~~を~~こ~~の~~ほ~~と~~洞と改~~め~~て~~呼~~ぶ~~事~~に~~あ~~る。ポ  
 グ~~ン~~は~~山~~か~~ら~~い~~て~~又~~村~~會~~と~~し~~て~~、~~今~~も~~洞~~民と  
 之~~の~~下~~に~~公~~員~~か~~ら~~い~~て~~。明~~の~~郡一~~概~~に~~大~~体~~同~~じ  
 概~~して~~あ~~る~~。  
 下~~等~~而~~明~~の洞の中~~に~~は~~七~~他~~の~~部~~落~~即~~ち~~近~~縁~~  
 か~~ら~~い~~て~~茶~~を~~飲~~む~~。之~~も~~茶~~の~~附~~近~~北~~新~~洞と~~呼~~ぶ~~事~~は

ある。ポグンは旧洞星の別名である。ポグンには今日いふ昔のオオサキの尊位、公衆の役目か、  
 今、明洞は今部落聯盟として二区に分  
 れて居る。集落形態に於いては明洞は七部  
 落相隣接して一大集落をなし、  
 古くより郡邑であることより、明洞は  
 集落景観として、  
 ポグンの尊位と公衆とは、今日の区長の  
 にあるもの、  
 部落の自治行政機関である。  
 尊位と公衆の区長は互選である。古くは

北内洞以下は、  
 北内洞 以下は 三戸  
 瓦規洞 三戸  
 校前洞 三戸  
 籃橋洞 四戸  
 水田洞 三戸  
 東内洞 五戸  
 北内洞 三戸  
 明洞内の七戸

公員は選挙は四月の致誠のあを其日に其の公  
 員を定めその不例いあり。その時は公員の  
 下に 公員も古例に申流以上の人家か  
 あり。尊位かをとり合は他にはない。尊位  
 は高きであり。實際用務は公員かつとめ  
 るのである。附近をめぐり場合には尊位公員か  
 中へとなす。

公指名するの例。尊位は何年か重任  
 する。公員は毎年交代する。尊位は部族の  
 の一者の人望者で高き者なり。公員  
 は若くよく働く人であり。其の又は行  
 職同として必要あり。尊位公員による  
 部族の自治的な仕事は其の代議不良者の訓  
 他部族との交渉。尊位は必ずし  
 も儒生にはない。山神の一月と七月致誠の  
 例に答へる。主として二人なり。

平南順州郡仙沼面藍浦里鳳下洞大村におけ  
 る若岡作富の郷土軍  
 順州郡内には古くからソレは行はれず、70  
 年代は行はれず。若岡作富は郡内では  
 一般に知られて居る。平島郡安房郡に  
 は十四年下郷土軍と云う思案労働隊の  
 組織が出来た。今も行はれない。郷土軍は格別  
 規律正しい労働隊で、隊長の命令は絶対的導  
 守され、耕作地の回復には角笛を吹いて  
 氣勢をあげ、道路に掃除機を走らせて  
 掃除機を走らせ、手不足の田主を借金をせしめ  
 労働隊に作業を依頼する。この郷土軍の  
 隊名は自家に耕地の少くない子弟が参加し  
 三才より三才五才位の若者が多く居る。  
 た。一時順州郡でも郡庁の農業指導員が  
 郷土軍の制を農民に紹介して居る。今は先  
 事も無い。

藍浦里

田植

紹介

一時順州郡

郡庁

農業指導員

労働隊

作業を依頼

隊名

自家に耕地

の少ない

子弟が

参加

三才より

三才

五才

位の若者

が多い

事も無い

藍浦里

田植

紹介

一時順州郡

郡庁

農業指導員

労働隊

作業を依頼

隊名

自家に耕地

の少ない

子弟が

参加

三才より

三才

五才

位の若者

が多い

事も無い

やろ

案内

案内

案内

案内

平南順州郡仙沼面藍浦里鳳下洞大村におけ  
 る若岡作富の郷土軍  
 順州郡内には古くからソレは行はれず、70  
 年代は行はれず。若岡作富は郡内では  
 一般に知られて居る。平島郡安房郡に  
 は十四年下郷土軍と云う思案労働隊の  
 組織が出来た。今も行はれない。郷土軍は格別  
 規律正しい労働隊で、隊長の命令は絶対的導  
 守され、耕作地の回復には角笛を吹いて  
 氣勢をあげ、道路に掃除機を走らせて  
 掃除機を走らせ、手不足の田主を借金をせしめ  
 労働隊に作業を依頼する。この郷土軍の  
 隊名は自家に耕地の少くない子弟が参加し  
 三才より三才五才位の若者が多く居る。  
 た。一時順州郡でも郡庁の農業指導員が  
 郷土軍の制を農民に紹介して居る。今は先  
 事も無い。

5 R

五

5 丁

2 丁

同作業班は去年まで行~~な~~て~~な~~い。二三戸で  
 パマシを組むのみである。今年も未定である。

近頃  
 事業後は女も盛んに田に出るようになった。

苗取りは昔から女の仕事として決る。去年  
 か今日は苗取りは~~分~~田の除草にもせかある

総出いよう。田道の□□□の両即~~は~~は、

農田、女は畑と~~い~~うか昔からの例である。

他郡には~~三~~區別なく女も苗取りには出~~な~~る。

五月、七月、四月と六月、七月。

苗~~の~~暇の多い月の順は

十二月、一月、二月の順序である。

あり。巴~~の~~に多に存月の順は

もよい。平日より~~幾~~よい御馳走を食う~~に~~

あり。田植之後の体あがりとして~~別~~に何

んし、~~三~~他の作業は~~もちろ~~ん。

あり。田植之後の体あがりとして~~別~~に何

同作業班は去年まで行~~な~~て~~な~~い。二三戸で  
 パマシを組むのみである。今年も未定である。

近頃  
 事業後は女も盛んに田に出るようになった。

苗取りは昔から女の仕事として決る。去年  
 か今日は苗取りは~~分~~田の除草にもせかある

総出いよう。田道の□□□の両即~~は~~は、

農田、女は畑と~~い~~うか昔からの例である。

他郡には~~三~~區別なく女も苗取りには出~~な~~る。

五月、七月、四月と六月、七月。

苗~~の~~暇の多い月の順は

十二月、一月、二月の順序である。

あり。巴~~の~~に多に存月の順は

もよい。平日より~~幾~~よい御馳走を食う~~に~~

あり。田植之後の体あがりとして~~別~~に何

んし、~~三~~他の作業は~~もちろ~~ん。

あり。田植之後の体あがりとして~~別~~に何

9

北部朝鮮

西部朝鮮

の共同作業

(草案稿)

(一) 明川洞の共同作業とくに郷徒<sup>ヒヤンド</sup>と附近<sup>ブジン</sup> 呂<sup>ロ</sup>付<sup>ツキ</sup>・尊位<sup>ソンイ</sup>と公員

(二) 平南順川郡仙沼面藍浦里鳳下洞大村における共同作業と郷土<sup>ヒヤント</sup>軍



書名 朝鮮社会 (52)

原稿番号: # 781-800

号数: 9本

字詰: 字× 行× 段( )

改訂指定: 改訂

文撰氏名: 朝日 (箱分) 月 日

植字氏名: (頁<sup>ミ</sup>ダシ<sup>ナ</sup>) 月 日

担当

22頁

0/21  
4

10

百回朝鮮甲申行東調査

12°

19

19

(草紙) 19

Blank lined area with a red arrow pointing to the right.

20×10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

No.

朝 鮮 年 中 行 事 調 査

堆肥の草は前年旧六月より八月までにか	月上旬より一月末まで	と加えて。また一年間の薪の運搬をす。十二	と家から畑まで運ぶ。一反十五位、牛糞	ら正月末まで加肥料運搬の一番良 <sup>多</sup> い時。堆肥	地の作業は氷で来ない。正月十五過ぎが	とやるだけ。十二月上旬より正月末まで	作業は野良で幼く事はないか、肥料の運搬	一月	明川郡下雲面明川の事例
--------------------	------------	----------------------	--------------------	------------------------------------	--------------------	--------------------	---------------------	----	-------------

は	里	山	の	る	る	っ	メ	ク	た
雪	。	ま	人	大	。	て	ま	×	も
が	牛	で	の	家	平	山	で	に	の
大	で	一	山	族	均	に	運	入	。
体	運	里	の	の	一	集	へ	れ	山
降	ぶ	以	は	家	戸	め	る	7	か
っ	。	上	何	。	三	7	。	牛	ら
7	一	の	人	自	百	あ	新	に	
い	度	と	か	家	五	る	は	ひ	正
る	で	こ	が	の	十		陰	か	月
	十	ろ	共	山	東	正月	の	す	の
極	二	も	同	あ	。	正月	七		堆
寒	東	よ	し	れ	五	に	月	一	肥
。	半	く	7	は	百	山	に	度	運
零	位	あ	買	そ	東	か	山	に	ひ
下		る	っ	の	も	ら	に	七	は
二	旧		7	山	い	も	行	メ	ク
十	正	平	銭	で	る	っ	っ	よ	ム
二	月	均	る		と	て	て	り	千
三	申	一		他	こ	来	銭	十	二

〆

^

食	1	十	〆	薪	や	〆	〆	度
に	て	五	正	運	う	急	肥	
は	い	日	月	ひ	な	を	料	以上
あ	る	休	元	肥	け	要	運	↑
ら			日	料	れ	す	搬	↑
ゆ	各	十	と	運	ば	る	は	↑
る	戸	四	大	ひ	氷	仁	二	↓
穀	で	日	晦	は	が	事	月	始
物	や	の	日	牛	と	で	末	の
を	る	状	の	車	け	は	不	か
入		況	二	男	て	な	三	ら
れ	前	で	日	か	か	い	月	正
て	氷	一	は	女	ら		に	月
焚	は	年	休	か	は	氷	及	末
く		の	五	男	と	つ	ぶ	まで
	十	家	〆	の	て	て	事	
そ	回	事	十	み	も	い	か	
の	日	を	回		運	る	あ	
火	の	予	日		へ	向	る	
の	晩	兆	十		ぬ	に		

場所	病	は	と	と	大	紫	の	か
は	祓	山	十	一	穀	は	塊	た
牛	い	神	五	て	穀	雨	の	ま
馬	で	の	日	食	を	、	色	り
加	あ	祀	前	う。	入	糸	を	を
入	る。	り。	の	部	れ	で	見	十
ら	山	祭	去	落	た	や	て	二
な	神	り	日	と	飯	る。	菜	個
い	は	の	を	し	は	。	す	並
山	部	名	ト	て	祀	ニ	る。	べ
	落	が	し	て	祭	木	。	る。
牛	毎	致	て	は	を	を	灰	。
馬	に	誠。	致	何	行	。	色	翌
加	あ	。	誠	も	う。	。	の	日
入	る。	豊	を	な	。	。	場	の
ら		年	行	い。	そ	。	合	朝
な	致	の	う。	。	れ	。	は	。
い	誠	祈	そ	。	飲	。	日	そ
	の	り	れ	。	福	。	で	の
	。	。					り。	火

宮川書房用箋

教	え	々	た	よ	部	祝	祭	祝	奥
目	子	。	と	む	落	文	官	文	深
前	。	回	た		内	を	は	を	く
に	今	十	い	そ	の	よ	別	よ	清
部	は	<del>十</del>	。	の	長	む	に	む	浄
落	豚	々	祭	人	老		た		た
の	。	ら	物	は	学		く	大	山
者	酒	回	は	自	肉			体	の
か	も	十	豚	然	の		各	は	意
集	。	号	と	に	あ		戸	厄	神
ま		分	牛	ま	る		主	祓	体
り		し	。	ま	者		加	い	は
集		て	十	り	が		一		何
会		献	マ	そ	代		人		も
す		お	と	の	表		一		な
る		す	者	た	の		人		い
。		。	た	め	の		行		。
		飯	も	の	祝		く		
各		を	の	酒	文				
戸		供	丰	会	を				

め	の	家	祝	よ	文	祭	致	飯
子	用	に	代	文	は	物	誠	と
。	意	行	表	。	二	の	の	鶏
尊	す	か	祝	。	種	時	一	羽
位	る	ぬ	文		あ	刻	お	つ
、	人	。	を		る	は	持	っ
公	は	祭	読		各	朝	っ	て
員	二	物	む		戸	で	行	っ
と	名	の	人		主	あ	て	行
そ	い	準	は		人	る	が	っ
れ	る	備	当		の	部	一	て
を	。	す	日		よ	落	般	に
い	任	る	肉		文	の	に	祀
う	期	人	食		も	有	正	る
。	一	も	せ		の	司	午	と
こ	年	然	ず		、	か	位	こ
の	と	り	。		代	や	に	ろ
二	し	。	葬		表	る	な	も
人	て	祭	式		の	祝	る	あ
は	き	物	の				。	る



部	部	に	行	高	毎	名	尊	や	祭
落	落	も	政	齢	年	す	位	る	の
と	の	あ	的	者	か	る	公	。	こ
の	の	る	で		わ	の	員	。	と
交	慶	。	あ	公	る	が	の	長	た
渉	節		る	員	。	例	の	の	け
。	の		が	は	尊		選	外	ほ
尊	時			若	位	尊	定	に	か
位	の		部	い	は	位	は	今	る
は	代		落	よ	部	は	互	も	の
必	表		の	く	落	何	選	あ	で
ず			仕	幼	内	年	す	る	た
し	不		事	く	の	も	る	。	く
も	良		は	人	一	つ	が		一
祝	者		お	。	番	つ			般
文	の		の	今	の	く	前		部
を	訓		す	の	人	が	任		落
読	誡		か	込	望	公	者		の
む			ら	長	者	員	が		公
と	地		他	は	で	は	指		事
									を

場	で	と	る	の	は	各	は	は
所	あ	致	が	代	は	戸	各	限
に	る	誠	前	表	部	で	す	ら
は		の	<span style="border: 1px solid red; padding: 2px;">前</span>	の	落	読	し	ぬ
人	人	場	の	佃	各	去	も	儒
は	は	所	形	人	戸	祝	儒	林
行	そ	は	式	の	主	文	で	公
か	の	牛	は	場	名	は	は	員
ぬ	山	馬	両	合	を	代	祭	物
	に	の	者	は	連	表	い	の
木	入	入	似	今	名	の		準
は	つ	り	て	こ	す	と		備
切	て	行	い	し	る	大		と
ら	も	ぬ	る	あ		体		や
ぬ	よ	と		たり	内	同		る
	い	こ		祈	容	い		
古		ろ		り	と			
木	致	を		た	な			尊
は	誠	選		い	つ	代		位
あ	の	ん		こ	て	表		は
				こ	い			

シ	<del>祭</del>	そ	か	シ	は	シ	<del>祭</del>	子	子
公	祭	こ	や	そ	は	その	は	左	そ
員	に	か	る	の	れ	の	ま	木	の
の	行	ら	が	場	る	神	ま	は	下
選	く	各		所	か	聖	つ	標	位
挙	は	戸	寒	で	入	な	て	準	の
は	男	に	い	そ	れ	範	い	に	と
正	の	分	か	の	の	圍	る	切	こ
月	の	け	ら	場	で	は		る	ろ
の	致	て	公	で	あ	神		た	
致	誠	や	員	簡	る	城		け	祭
の	の	り	加	単		と			壇
あ	あ	各	肉	に		し		教	は
と	と	戸	等	飲		て		百	平
そ	そ	で	を	福		は		年	ら
の	の	飲	表	を		な		前	に
日	日	福	に	各		い		よ	し
に	に	す	運	戸				り	て
次	次	る	び	主		牛		先	あ
				人		馬			

た	も	ㄣ	別	ㄣ	は	は	の
め	寝		に	十	公	他	公
で	せ		行	二	員	に	員
あ	ぬ		事	月	加	は	を
る			は	末	や	な	中
	眠		な	日	る	い	流
(	水		い	は			以
二	ば			飲			上
ト	ま			食			の
は	ま			物			家
京	中			の			尊
城	か			準			位
て	白			備			が
は	く			し			主
十	な			て			に
二	る			食			な
月				へ			る
一	魔			る			会
日	よ			だ			合
	け			げ			合
こ	の						
	供						

決める。公員の定で集まる。公員も

【シヤル】

元日	祭	除夜	え	が	か	こ
は	を	の	る	今	今	では
何	や	行	よ	は	は	正月
も	る	事	う	や	や	十四
ない	表	。	に	ら	ッ	日
	に	。	換	ぬ	て	夜
	行事	。	摺	。	い	。
御馳走を食うだけ。	行事	。	す	年	ない	10
	はない	。	る	上	。	大
	い	。	こ	者	。	体
		。	と	に	。	事
		。		対		変
		。	食	し	は	前
		。	物	て	。	。
		。	な	新	旧	15
		。	と	年	歳	ま
		。	と	を	拜	ま
		。	せ	よ	は	で
		。	ぬ	く	や	や
		。		迎	ッ	ッ
新歳		。		。	た	た
歳		。		。	る	

12

正	は	宗	く	本	文	は	に	<del>祀</del>	拜
朝	御	官	か	家	章	宗	祀	一	は
茶	馳	に	泊	加	家	家	祭	い	あ
禮	走	ち	り	隣	と	に	か	事	る
に	が	川	に	部	い	集	あ	で	が
不	出	様	行	落	う	ま	る	あ	今
可	来	な	く	に	。	る	。	る	は
欠	た	。	。	あ	大	。	。	。	す
は	か	茶	重	っ	文	分	一	十	た
白	ら	禮	要	て	章	家	時	二	れ
餅	っ	は	な	も	家	に	頃	月	た
の	い	簡	分	行	加	対	。	末	。
汁	で	単	家	く	宗	し	各	日	美
ト	に	で	の	。	家	て	戸	の	俗
ク	祖	あ	者	夜	。	大	で	深	で
ク	先	る	だ	中	本	本	や	祀	あ
(ク)	を	。	け	早	家	の	る	即	っ
で	祀	正	か	く	の	事	。	ち	た
あ	る	月	行	行	。	を	分	元	が
る	。		く				家	旦	お

廻禮

前まで

直後

部落内の年長者に對して。部落外の特  
別関係者年長者。常

に年長者に對して。家庭外では男、家庭内  
では女。男は家庭内も。禮をす  
るだけ。その時

の挨拶の言葉は過歳を安寧にす  
ましたか

という。

サ  
ル  
70  
リ  
は  
元  
旦  
一  
十  
五  
日  
ま  
で  
に  
な  
し

6

✓

5

10

15

飯

の算木によろ。	の運を占う。	十五日に年占いさやろ。	書いた。	立春の日。	正月とは限らぬ。	必要にやるから正月と
大低やつて貰う。	今も二三人はあろ。	家運、	部落内の名筆に書いてもらつていた。	別に何もせず。二十年も前には名句を内に	近來は全然なし。	厄
	卦。					の人も
	金木土水火	土亭秘訣に				

↑

↑

✓

その



~~十回~~

の	<del>は</del>	十	凶	方	穀	細	の	十
サ	は	五	作	沈	類	(五)	は	回
ウ	な	日	を	み	もの	と	神	日
ゴ	い	(ホルム)	意味	方	一	い	気	の
リ	非常	に	す。	を	つ	う。	か	夜
巫	また	は	十	見	ふ		よ	の
又	古	何	四	て	を		く	五
は	く	も	日	占	器		つ	穀
神	横	せ	に	う	の		く	飯
耳	数	ぬ。	や	。	水		よ	に
に	防		る	沈	の		う	入
た	は	立	。	む	中		に	れ
の	は	竿		の	に		そ	て
五	あ	。	は	は	入		の	た
	っ	竿	よ	よ	れ		算	く
	た	。	く	く	て		木	。
	一	横	な	い	。		の	入
	種	数	い	浮			事	れ
		防	。	び			を	る



の	対	戦	投	巫	で	は	は	
つ	抗	は	戯	で	な	い	今	十
い	で	回	相	な	い	る	い	六
た	や	十	(十五)	い			な	日
夕	る	年	行	が	サ	読	い	の
イ		も	う	分	ル	経		鬼
マ	通	前		る	が	士	四	神
ワ	具	に		人	リ	は	十	日
で	は	あ	板	か	は	い	一	は
た	夕	ッ	と	あ	巫	な	年	な
た	イ	た	こ	る	は	い	前	い
ま	マ		は		い		に	
合	ワ	(十五)	寒		な	神	な	古
う	に	五	く		い	耳	く	く
	火	施	て		が	は	な	か
勝	を	行	虫		神	巫	ッ	ら
負	ッ	う	来		耳	的	た	な
は	け		ぬ		か			い
し	て	部			や	読	神	
り	火	落	炬		る	巫	神	巫

5

10

15

読

は	男	月	こ	将	が	こ
な	も	を	の	の	李	く
い	女	は	時	橋	朝	者
	も	い	健	は	念	か
前	少	め	の	今	の	ぬ
に	し	て	夜	と	遊	よ
当	や	見	い	も	戯	あ
地	る	た	の	や	河	る
で		人	子	る	と	
や	老	か	な		い	服
つ	幼	男	か	威	う	装
た	皆	の	め	興	大	は
	や	子	な	て	将	手
今	る	を	か	は	あ	拭
で		産	ら	盛	っ	を
も	政	衣	や	厄	た	か
中			る	を		ふ
南	国	踏		ふ	そ	る
鼻	は	橋	そ	せ	の	
で	今	は	の	ぐ	大	髪

~~書~~  
~~地~~  
 書  
 地

七宝山  
南心寺  
七宝山  
南心寺

節	コ	に	戸	は	ハ	寺	盛
今	一	来	中	儒	日	は	人
の	面	る	二	林	に	こ	に
時	七	。	戸	は	行	の	や
は	宝	不	行	行	く	附	る
何	山	定	く	か	。	近	。
も	用	期	。	な	男	に	
し	心	で	。	か	女	に	
ない	寺	あ	三	。	共	な	
	。	る	四	。	に	い	
	上	。	十	。	行	。	
	雲	こ	年	昔	く	遠	
	南	こ	前	は	。	く	
	面	より	より	男	儒	に	
	の	。	。	も	林	あ	
	寺	七	。	行	も	る	
	洞	里	僧	か	行	か	
	の	半	が	ぬ	く	ら	
	百	の	托	。	。	回	
	鹿	上	鉢	百	昔	月	
	寺	。					

互	下	下	北	理	か	に	二	二月
屋	坪	雲	し	自	ら	寒	月	
は	洞	面	い	豪	一	い	に	仁
西	に	に					寒	事
角	い	カ	肥	で	般	屋	食	は
百	る	知	料	や	に	根	か	正
六	二	屋	の	る	寒	葺	あ	月
洞	三	は	運		食	か	れ	延
に	戸	隔	搬	紙	は	き	ば	長
昔	は	洞	等	以	三	改	鋤	二
か	昔		あ	り	月	造	き	月
ら	か	成	か	竹	農	田	し	新
あ	ら	鏡	う	穂	肉	に	め	し
つ	面	洞	い	さ	の	末	を	い
た	内		そ	作	時	る	や	仁
(約	に	明	か	る		の	子	事
甲	あ	川	し		農	は		は
位)	つ	洞	い	新	具	寒	非	た
	た			合	修	食	常	い

竹穂

書名 朝鮮社会 (50)

原稿番号：# 801~820

号数：

9本

字詰： 字× 行× 段 ( )

改丁指定：

文撰氏名： 朝日 (箱分) 月 日

植字氏名： (頁<sup>ヘミダシ</sup>ナ) 月 日

担当

寸	部	年	介	食	寒	正	行
事		前	子	わ	会	通	
は	十	の	推	ぬ	と	い	明
な	月	事	の	事	し	て	と
い	一	は	古	か	て		寒
	日	な	事	あ	古	祝	食
主	に	い	に	つ	同	祭	は
人	毛		よ	た	と	と	同
か	又		る	か	し	墓	一
休	ム				て	詣	又
む	の	休	冷	今		り	また
日	解	め	や	は	火		は
に	約	の	飯	そ	を	墓	一
は	二	日	食	人	た	の	日
毛	月	は	わ	な	か	脩	違
又	一	清	ぬ	事	ぬ	繕	い
ム	日	明	の	は	冷	を	清
も	に	寒	は	し	や	や	明
休	休	会	数	な	飯	る	寒
む	ま	を	百	い	を		食

5

10

15

秋

う。	会	十	の	千	百	秋	は	警	改
儒	員	田	祭	坪	五	典	な	整	白
道	が	。	典	か	十	の	い	の	
会	参	そ	費	あ	名	事	。	目	
で	会	れ	は	る	。	。	虫	に	5
講	一	で	道	。	事		か	は	
演	で	秋	で	毎	変	二	蘇	節	
会	盛	典	き	年	前	月	生	儀	
も	大	費	め	二	は	と	す	と	
や	に	に	る	千	教	八	る	し	10
子	行	は	。	四	百	月	日	て	
。	う	回	昨	位	名	。		日	
会	自	回	年	の	。	今		か	
の	今	に	は	收	郷	は		あ	
保	分	な	春	入	校	四		る	15
管	は	ら	秋	か	財	十		だ	
は	不	ぬ	二	あ	産	。		け	
郡	満	。	回	る	六	参		。	
で	と	恭	で	。	万	集		行	
	い	聖	九	春	四	者		事	



日	垂	る	設	三	そ	少	や
で	献	人	飲	百	の	限	春
は	は	は	福	田	前	秋	る。
午	一	畜	林	位	ま	多	自
の	番	や	は	倫	で	い	令
十	の		明	<del>倫</del>	は	時	達
時	人	知	儒		牛	は	は
頃	物	人	堂		も	千	九
		の	で		殺	円	十
	終	家	や		し	以	回
	献	に	る		た	上	以
	は	泊	家			二	外
	人	る	の		豚	去	は
	物		外		一	年	知
	<del>ま</del>	郡	で		頭	も	う
	は	守	も		で	豚	下
	真	が	や		二	も	ぬ。
	員	初	る		百	殺	百
		献	る		斤	し	円
	今		中		で	た	で
		泊					最



五	五	各	選	加	三	あ	被	約	
十	十	面	出	か	年	る	選	一	
名	名	事	は	や	。	。	挙	月	
七	の	務	三	る	真	以	は	前	
十	選	所	年	。	員	上	七	に	5
名	挙	に	毎	焚	は	四	献	明	
	委	集	の	香	任	。	官	儒	倫
	員	ま	一	式	期	八	と	堂	
	を	す	月		毎	名	都	で	
郡	選	。	に	毎	月	位	執	役	10
内	舉	郡	各	一	。	。	神	員	
の	一	か	面	日	毎	掌	典	の	
儒	。	ら	に	と	月	議	司	選	
林		各	お	五	の	は	官	挙	15
は	そ	面	。	日	真	十	。	の	
二	れ	に	。	。	員	名	大	会	
二	か	お	選		又	(各	徳	議	
二	集	。	挙	掌	ま	面	人	が	
名	ま	。	す	議	た	一	あ	あ	
	る	約	す	の	は	人	子	。	
	。		。		校	で			
					官	。			

録  
録

希	会	も	春	二	無	も	の	現
望	か	す	に	下	学	せ	本	在
者	あ	。	泊	三	は	ぬ	来	の
だ	る	。	り	十	入	。	ぬ	儒
け	。	五	齋	名	ら	家	人	林
教	と	日	戒	地	は	柄	は	は
人	。	糶	す	は	。	に	入	儒
で	た	。	子	家	郡	よ	ら	道
や	ま	。	。	柄	内	る	ぬ	漢
っ	に	。	大	で	函	。	。	学
た	詩	。	政	入	班	函	。	を
。	の	。	。	る	で	難	。	学
儒	会	。	後	の	漢	加	。	ん
林	は	。	後	み	学	標	。	だ
の	あ	。	会	。	の	準	。	人
者	る	。	。	祭	。	。	。	の
。	事	。	秋	は	。	。	。	み
郡	が	。	も	前	。	函	。	。
守	あ	。	臨	日	。	班	。	漢
の	る	。	時	か	。	で	。	学
。	。	。	総	ら	。	も	。	。

糶典

無学

は

糶典

總會  
後飮  
礼

の

す	か	作	年	め	て	〽	三	か	講
る	1/4	物	交	る	麦	昨	月	ら	演
と			替		を	年		の	等
播	大田	各		麦	籾	の		諸	か
種	は	戸	今	の	く	秋			あ
す	主	平	年	作		耕			る
る	と	均	麦	付	三	を			
	一	耕	な	は	月	や			勤
三	で	地	ら	各	に	つ			農
月	粟	二	来	戸	寒	た			の
末	と	十	年	と	食	と			た
四	麦		粟	も	か	こ			め
月		大		多	あ	ろ			の
上	大	田	こ	い	れ	に			
旬	豆	が	こ		ば	少			新
に	は	分	で	麦	そ	し			制
か	麦	の	は	と	の	鉄			は
け	が	三	重	粟	時	を			な
て	発		要	と	か	入			つ
苗	芽	田	な	一	ら	れ			て

(田九月頃、収穫の直後)

5

10

15

4	行事	寒い	苗代	坪に	一	町	に	か	代
三		い	代	に	ル	六	よ	し	の
月		か	で	植	ル	ル	っ	い	準
三		ら	な	え	リ	ル	て		備
日		四	い	る	二	ル			
に		五	い	る	日	し			
は		下	。	苗	で				
何		月	各	の	か	約	が	八	立
も		に	戸	作	か	十	あ	ル	夏
せ		な	で	る	る	二	る	り	の
ぬ		っ	や	の	。	日		の	前
		て	る	に	苗	か	二	麦	に
		か	。	二	代	か	日	の	終
祀		ら	。	三	を	る	位	播	る
祭				日	つ	。	か	種	三
も					く	大	か	に	月
せ				今	る	豆	る	手	は
ぬ				で	の	の		の	相
				も	に	播	各	取	当
上			套	共	は	種	戸	木	い
社			は	同	下	は	二	方	そ

次のページ  
を  
入  
れ  
る

を 用 う る	農 事 は 比 較 的 楽	農 事 は 麦 と 粟 の 除 草	四 月	各 戸 で や る た け で 本 家 に は 集 ま ら ぬ	寒 会 に は ヨ モ 和 餅 を 各 戸 で 作 る 祝 祭 は 朝 行	十 二 月	三 日 祈 る の 事 な し	三 日 祈 る の 事 な し	祀 る 事 な し	日 と は 名 だ け 何 も せ ぬ 苗 代 を 作 る 時 に 神
------------------	---------------------------------	---	--------	--	---	-------------	--------------------------------------	--------------------------------------	-----------------------	--

次の頁の指巻の  
とこへ入れる

2下

◎ 道路修理は新四月と新丁月頃

◎ 地積は一日耕ハルカリ(千坪)で麦一石五

斗(搗く糸のもの、<sup>五升</sup>搗けは四升になる)

◎ ハルカリ

◎ 百坪は一負(ハンジム)という。夏に大豆

の同作をやる。大豆が一ハルカリで二石五升

。種農家(野菜作り)か下部あり。全部で十

二、三町歩。ニニニクを作る。野菜を曲石車と

手廻り者がある。営業的の人(千坪以内)。昔

から野菜の△△△かあった。明川△△△うら

。ニニニク△△△の道地はニニニである。そのた

め昔からあり。反当収入はニニニ多い。他よ

り倍以上の収穫になる。明川△△△は二百人十坪

位。

◎ 旧三月雪解のあと井戸~~は~~、共同でやる

。記はない。



説 <small>僧</small> 法 <small>が</small> す	は	あ	か	る	相	↳	行	は
法	自	る	ぬ	も	当	ハ	事	山
す	家	命	も	の	盛	リ		菜
る	で	の	の	で	ん	ハ		を
僧 <small>が</small>	炊	祈	像	あ	で	ハ		多
	い	願	の	る	あ	ハ		く
	て	を	沐	も	っ	ハ		用
会	も	す	浴	男	た	ハ		う
集 <small>衆</small>	ら	る		も		誕		
に	っ		そ	女	十	祭	特	10
説	て	末	れ	も	年	の	に	
教	供	を	お	寺	前	事	多	
す	す	も	寺	詣	ま	を	い	
る	る	っ	見	り	で	そ	の	
		て	物	は		う	は	15
報 <small>記</small>		す	沐	す	今	い	わ	
で	何	行	子	る	は	う	ろ	
は	人	き	の		微		び	
ない	<		行	寺	々	前		
い		世	事	に	た	は		
	=	話	が	行				



今	特	里	か	ま	か	の	る	い	祈
は	定		本	ぬ	今	ゑ			子
そ	の	お	物	お	は	事	祈	祈	の
の	僧	寺	お	お	な	も	子	子	祈
家	と	に	寺	寺	い	な	の	の	り
は	契	は	詣	で		い	ん	た	を
三	約	泊	り	燈	ハ		め	め	女
百	し	る	は	を	り	前	に	に	加
束	ア	宿	と	あ	ル	は	岩	寺	や
以	ハ	か	ま	け	の	ハ	に	に	る
外	ハ	あ	り	子	日	り	祈	女	
に		子	か		は	ル	る	か	七
た	そ		け	吊	休	に	事	行	星
て	の	檀	で	燈	み	花	は	く	園
る	僧	家	行	と		煎	な	人	は
身	の	は	く	い	事	餅	い	も	こ
に	家	寺		う	妻	加		た	こ
な	に	の	往	復	後	あ	巫	ま	て
っ	泊	内	復	用	は	っ	に	に	は
て	る	の	七	城	休	た	た	あ	な

園

に	し	田	五月	で	は	か	こ	た	い
祭	。	植		か	極	ら	の	い	る
は	畑	<del>植</del>		せ	め	、	辺	。	。
全	の	<del>か</del>		ぐ	て	寺	で	前	寺
然	除	初		。	少	の	は	は	に
な	草	ま			い	役	田	多	は
い	。	る			。	さ	田	か	一
。	蚕	。			そ	す	で	フ	ニ
田	の	。			わ	る	た	。	名
植	飼	田			で	報	い	。	位
<del>植</del>	い	植			托	酬	。	今	し
に	は	<del>る</del>			鉢	と	僧	は	か
は	い	の			。	し	は	殆	僧
フ	め	あ			頌	米	寺	ど	檀
レ	。	と			末	を	の	檀	家
は	田	の				貫	財	家	も
な	植	農				う	産	は	ち
い	<del>植</del>	休			檀	。	が	な	の
。	の	み			家	。	あ	い	か
昔	時	な			等	。	る	。	い

な	れ	が	祭	の	員	も	今	農	か
ど	を	全	の	あ	が	雇	は	事	ら
に	附	部	時	い	あ	う	賃	に	な
も	近	落	に	た	っ	か	銀	も	い
附	と	民	や	人	た		一	余	5
近	い	を	る	を		昨	日	り	た
を	う	率		雇	隣	年	五	マ	ま
や		い	病	う	洞	か	円	マ	に
る	今	て	人		又 <sup>きた</sup>	ら		シ	マ
	で	除	で	郷	は	学	三	な	マ
四	も	草	困	徒	洞	校	食	し	シ
五	や	な	る	無	内	見	食		は
名	る	と	家	賃	か	童	わ	雇	あ
で		や	の	銀	ら	動	し	人	る
や	家	っ	た	労	雇	員	て	夫	か
る	の	て	め	力	う			と	あ
場	新	や	に	奉		遊	洞	入	ま
合	築	る		仕	一	閑	内	れ	り
も	の		尊	は	寸	人	の	る	な
あ	時	そ	位	四	手	動	人		い。

ン	脚	に	ㄣ	行事	と	か	時	の	る
コ	戦	墓	端	事	は	命	、	時	。
を	(ア	祭	午		は	じ	何	は	十
や	シ	を	に		関		か	ヒ	才
る	ズ	墓	は		係	公	困	中	以
	モ	で			し	員	る	ド	下
	ウ)	行	四、		な	が	時	は	の
脚	た	う	五、		い	が	、	や	死
戦	ま		六		が	実	や	ら	人
は	に	六	の			際	る	ぬ	の
各	弓	日	三		近	に			時
個	術	は	日		く	指	最	家	も
人	を	娛	休		に	揮	大	の	フ
で	行	樂	取		お	す	規	建	グ
や	う	の			ん	る	模	築	ン
る		遊	四	親	は		の		15
	女	が	日	字	は	附	の	で	
と	は		か	同	同	近	時	病	や
こ				族	族	は	は	人	る
か	フ	男	五			同	尊	あ	。
の	う	は	日			族	位	る	そ



が	朝	の	脚	洞	賞	主	行	若	中
、	十	会	戦	に	品	権	く	男	心
他	時	長	と	は	は	者		女	部
に	頃	ち	は		す	<del>者</del>	五	皆	落
も	か	と	角	十	て	は	人	見	で
随	ら	も	力	一		明	扱	物	や
時	五	そ	の	女	洞	川	ま	す	る。
に	時	の	事	里	外	洞	の		
や	頃	時		地	や	の	地		参
る	ま	に	数	面	官	商	勝		加
時	で	出	千	の	公	人	ル	ッ	者
か	端	来	名	も	署	<b>組</b>	1	た	は
あ	午	る	集	あ	等	<b>合</b>	ル	者	沢
る	に	有	ま	る	か	(市	は	に	山
	は	力	る	が	ら	民	は	順	
事	毎	者		参	出	会	場	次	見
変	年	か	脚	加	る	が	で	か	物
に	や	な	戦	す		や	ま	か	人
な	る	る	大	る	明	る	め	ッ	も
っ			会		川		る	て	老

予己	草	各	蒲	熱	<del>期</del> 期	は	ら	附	て
染	葉	戸	湯	望	し	同	に	近	か
は	ヨ	で	は	し	て	い	も		ら
な	モ	作	用	て	い		行	見	や
い	カ	る	い	い	る	怪	く	物	ら
	松		ぬ	る		我		人	ぬ
	の	一			露	す	フ	は	
	実	日	醬	事	店	る	ラ	男	女
	皮	で	油	変	も	事	ン	と	の
	写	て	作	後	沢	は	コ	女	フ
	を	出	り	は	山	あ	に	と	ラ
	い	来	は	四	来	る	も	角	ン
	ル	る	は	五	て		賞	カ	コ
	た		四	六	い	医	品	ヤ	は
	餅	端	月	休	る	者	か	フ	角
	を	午		と		か	あ	ラ	カ
	つ	の	作	休		か	あ	ン	の
	く	即	る	ま	今	き	る	コ	場
		馳	だ	ぬ	往	て		コ	場
		走	け		民		主	ど	所
	象	走		草	は	待	催	ち	の
	で	は							

神	下	位	一	獲	め	至	六	
祀	旬	も	ハ	は	ア	四	麦	月
り	田	ッ	ル	三	少	回	の	
も	草	テ	カ	月	教	行	收	
た	取	い	リ	中		う	獲	5
い	り	る	の	旬	明			
			麦		川	ニ	田	
伏	は	上	の	す	洞	回	の	
も	何	旬	收	心	こ	加	除	
や	も	田	獲	脱	ニ	多	草	10
ら	せ	草	は	穀	十	い	六	
ぬ	ぬ	取	一		戸		月	
		り	日	秋	足	取	一	
大	祝			の	ら	り	七	
も	祭	中	牛	菜	す	養	月	15
食	も	旬	は	畑		蚕	二	
わ	せ	麦	農	の		家	田	
ぬ	ぬ	の	家	播	麦	は	三	
		收	の	種	の	は	回	
川	田	獲	四	合	收	極	た	

四合の一

方	山	ら	値	八	各	七	月	節
は	山	。	か	月	戸	水	は	び
大	神	山	少	に	自	田	何	も
体	祭	を	く	入	家	と	も	な
冬	は	ま	な	る	の	粟	な	し
の	七	つ	る	と	時	の	い	。
時	夕	る	。	落	除	草	伏	
と	の	事	葉	葉	八	。	の	
同	日	は	が	し	月	暹	時	
じ	か	な	つ	か	暹	上	に	10
。	そ	い	い	け	が	旬	餅	
男	の	。	た	て	水	頃	を	
も	前		ま	い	は	。	食	
女	日		ま	る	は	中	う	
も	に		ま	の	新	旬	家	15
行	や		の	で	伐	よ	も	
く	る		新	で	り	り	あ	
。	。		で	。	は	新	る	
女	祭		あ	新	去	伐	。	
は	り		る	の	来	り	六	
			か	価	ぬ	。		

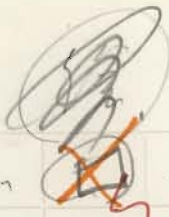
七、八月。新伐りは  
 八月月上旬まで。堆肥の草採り。乾草製造。



外	や	一	度	ぬ	っ	命	家	っ	肉
に	っ	日	<del>ぬ</del>	っ	っ	け	に	て	も
は	に	休	で	酒	帰	て	命	食	ち
た		み	あ	も	る	そ	け	う	に
い	干		る	多		れ	て		行
	前	去		く	そ	れ	ま	肉	く
祀	中	年	山	は	の	用	さ	ほ	
祭	に	の	で	用	日	い	げ	生	飲
な	至	夏	の	い	に	て	子	と	福
し	誠	も	一	ぬ	は			煮	は
	は	や	部		歌	飲	そ	た	山
白	あ	っ	の	お	も	福	れ	<del>も</del>	で
中	る	た	肉	み	お	す	を	平	来
は			は	き	と	る	そ	分	た
何	七	こ	煮	頭	り		の	づ	者
も	夕	ん	る	く	も	大	場	っ	全
な	の	度		だ	し	部	で	各	部
い	行	の	至	け	て	命	各	々	が
	事	春	誠	の	な	は	ず		集
寺	は	も	日	程	う	持	に	各	ま

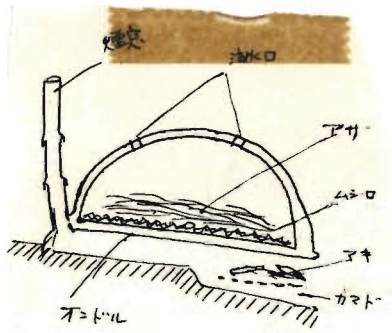
7411  
6cm

6cm



ま	上旬は新伐の仕事。秋夕前後より収穫にあたる。	八月	く	<del>麻</del>	て	共	く	麻	で
る			除	は	は	同	を	も	
栗			草	は	な	で	乾	か	何
末			の	供	い	と	か	っ	も
毛			あ	出		す	し	て	ない
口			と	す		時	て	と	い
コ			は	る		は	東	す	白
シ			は	残		新	に	時	中
大豆			な	り		か	す	は	場
の			い	は		安	る	部	も
順序	順	春		く	そ	落	ない		
で	順	の		か	れ	同	い		
あ	後	の		か	か	で	洗		
る	より	ま		る	七	と	15		
	収穫	な		冬	月	し	鋤		
	にあ	時		で	の	皮	宴		
	始	に		と	仕	を	は		
		つ		す	事	は	ない		
		と		の	は	い	い		

カット 別紙①



書名 朝鮮社会 (54)

原稿番号：# 21-250

号数：9ホ

字詰： 字× 行× 段 ( )

改丁指定：                    

文撰氏名：朝日 ( 箱 分) 月 日

植字氏名： ( 頁<sup>ヘミダシ</sup> ) 月 日

担当

や 子	に 秋	一 日	秋	三、 回	月 は	ぐ 。	大 豆	早 く	大
ラ ン コ	夕 の	休 業。	夕、	月 で	非 常	秋 の	加 九	収 獲	豆
角 カ	事 の	非 常	暮 祭	あ る。	に	の	月	を	は
は や る	申 シ	に	を		多 ク。	収 獲。	中 旬	要 す。	九 月
が	と	多 ク	朝 の		一 年	毛	頃	箱	入
端 午	は い	に	内 に		中	口	ま で	は	。
の 時	わ ぬ	の 人	は や る		一 番	コ シ	末 の	下 旬	栗
の	ぬ か	は	。		多 ク	は	刈 入	よ り	は
	そ の	遊 ば	。		は 人	八 月	入 れ	中 下 旬	。
	類 の	ぬ 。	。		は 人	下 旬	か 終	。	。
	事 を	。	。		九 月	頃	る と	。	。
		時	。		と	ハ	可 。	。	。

4	九月	たい	4	九月	終	各	作	三	様	よ
九月	末	い	農	日	日	各	る	々	に	5
重	ま	。	事	能	命	分	。	伍	集	
陽	ま	。	。	不	け	け	。	々	団	
祀	か	。	八		る	る	。	で	の	5
祭	か	。	月				。		に	
も	か	。	の			多	。	殺	部	
た	子	。	の			岐	。	す	落	
い	。	。	收			で	。	。	内	
			獲			あ		部	で	10
			運			る	。	落	角	
			搬				。	で	力	
秋			の			暇	。	一	と	非
社			継			か	。	頭	7	常
日			続			た	。	買	う	に
も			。			い	。	7	ン	15
た			晚				。	て	コ	
い			穀			そ	。	そ	。	
			す			れ	。	れ	餅	
收			る			で	。	を	炸	
獲			暇						り	

上旬より粟、米、大豆の脱穀が始まる十一	十月	行 <sup>る</sup> 。を雨 <sup>れ</sup> とい <sup>う</sup> 。墓 <sup>墓</sup> を <sup>た</sup> れ <sup>白</sup> か <sup>又</sup> また <sup>は</sup> 雨 <sup>れ</sup> 日 <sup>日</sup> に	帰 <sup>る</sup> 来 <sup>る</sup> 。重 <sup>陽</sup> の事 <sup>は</sup> 九 <sup>日</sup> とい <sup>う</sup> 。十 <sup>九</sup> 日	位 <sup>土</sup> の <sup>あ</sup> る <sup>墓</sup> も <sup>あ</sup> る <sup>地</sup> に <sup>行</sup> く <sup>て</sup> い <sup>る</sup> 若 <sup>も</sup>	時 <sup>亭</sup> は <sup>九</sup> 日 <sup>か</sup> 十 <sup>九</sup> 日 <sup>に</sup> や <sup>る</sup> 。内 <sup>中</sup> で <sup>も</sup> や <sup>る</sup> 。	は <sup>末</sup> ま <sup>が</sup> 非 <sup>常</sup> に <sup>多</sup> 坑 <sup>。</sup>	木 <sup>に</sup> つ <sup>け</sup> て <sup>さ</sup> す <sup>。</sup> 十 <sup>月</sup> の <sup>行</sup> 事 <sup>で</sup> あ <sup>る</sup> 。	祭 <sup>は</sup> な <sup>い</sup> 。其 <sup>れ</sup> 以 <sup>後</sup> も <sup>な</sup> い <sup>。</sup> 福 <sup>積</sup> の <sup>上</sup> に <sup>モ</sup> 千
---------------------	----	--	--	--	---	--	---	---

農事は十月のついき。十一月十日十二月にかける

十一月

✓ 漁業

で	は	作	を	四	小	月
そ	昔	る	い	月	の	一
れ	か	。	に	一	時	は。
は	ら	他	に	日	で	い
は	や	に	る	に	あ	ま
宗	ら	は	祭	種	る	て
家	ぬ	つ	。	家	。	。
の	。	く	休	祭	時	大
事	忌	ら	ま	上	亭	豆
で	祭	ぬ	ぬ	山	は	か
。	を	。	。	神	こ	一
一	行	男	各	祭	こ	者
般	う	女	戸	を	で	お
は	ほ	共	で	や	は	く
祖	両	に	や	子	余	れ
文	班	や	子	。	り	る
ま	は	る	。	種	や	。
で	高	。	餅	家	ら	相
。	祖	時	た	の	ぬ	当
婚	ま	亭	け	死	。	多

5

10

15



	日	は	土	搬	極	十	以	新
	を	別	地	出	寒	二	は	運
	定	に	の	か	で	と	ま	搬
	め	な	凍	あ	あ	つ	だ	(十
	て	い	結	る	る	く	作	二
	作		は			る	ら	月
	る	十	十	仕		犬	ぬ	一
	の	二	一	事	仕	き		月
	で	月	月	は	事	は	至	迄
	は	は	上	相	も	や	冬	
	な	仰	旬	当	出	ら	に	地
	い	馳	か	あ	来	ぬ	祖	に
	穀	走	ら	る	ぬ		祭	仕
	類	は	寒			休	と	事
	か	食	食	狐	新	日	行	は
	多	う	才	祭	運	と	う	な
	い	か	下	は	搬	な		い
				な	穀	る	小	
		別	遊	い	物		豆	縄
	に	に	戯		の		力	や

20

た	も	元	は	農	今	元	正	順
。	と	日	地	具	は	日	月	川
十	は	は	凍	の	元	日		郡
五	脈	は	結	終	日	よ		仙
日	を	朝	了	理	と	り		沼
ま	用	早			十	十		面
ま	い	朝		二	日	五		
つ	た	祖		月	以	日		の
い		先		三	後	の		事
け	各	祭		月	昔	み		例
て	産	神		榮	は	休		
用	に	位		細	縄	去		
い	合	字		工	た	前		
た	け	置			ひ	に		
。	る	し		三	造	は		
朝	二	祭		月	り	遊		
飯	三	物		中	り	ん		
の	頭	を		旬	ワ	で		
後	殺	供		旬	ラ	い		
親	し	す		ま	ラ	た		
				で	ジ	。		

84




5

10

15

一行



大	親	各	の	い	た	頭	奇	あ	せ
体	の	村	主	つ	。	民	は	れ	き
正	事	に	な	た	。	と	大	ば	廻
月	を	割	予		の	も	村	各	り
十	会	り	定	部	下	い	よ	戸	す
日	議	あ	行	落	に	つ	り	全	る
前	と	て	事	会	に	た	今	部	
後	た	を	を	は	任		村	に	二
に				里	か	大	に	ま	下
や	そ	そ	会	首	あ	村	長	わ	三
っ	の	の	議	の	っ		は	り	年
た	会	運	事	家	た		里	こ	前
	議	搬	項	に			首	こ	よ
日	を	の	は	集	里	に	介	こ	り
露	里	事	郡	ま	任		川	は	す
戦	会	を	の	つ	は	頭	郡	五	た
争	と	会	穀	た	執	民	は	十	た
前	い	議	倉		事	か	尊	戸	。
ま	っ	又		一	と	あ	位		年
で	た	戸		年	も	っ	又	以	上

家	え	食	か	十	な	また る	す	9	っ
で	る	う	を	四	る	館	る	十	い
や		事	持	日	様	を	様	四	い
っ	十	は	っ	の	に	食	に	日	た
た	五	な	て	夜	酒	う	と	ソ	
後	年	い	く		を		夕	バ	
	前		る	福	の	歯	食	き	
本	ま	十		望	去	か	の	食	
家	で	五	十	廿		強	時	う	
う	あ	日	五	と	以	く	に		10
ン	っ	祖	日	い	上	な		ソ	
午	た	先	の	っ	三	る	十	ハ	
		の	一	て	品	た	年	が	
に	家	祭	時	地	十	め	前	長	
行	々	り	頃	表	四		ま	い	15
く	で			に	日	耳	で	か	
	や	薬	ホ	入	夜	か	あ	う	
祖	る	飯	ル	っ	た	さ	っ	長	
先		を	ム	て	ハ	と	た	生	
祀	自	供	を	何	る	く		ま	

五	か	を	か	そ	て	か	大	又	の
は	や	や	や	ん	一	り	本	そ	時
に	子	子	子	か	番	。	表	の	は
た				ら	大	寒	で	本	い
こ	月	男	事	小	ま	食	は	表	つ
を	を	の	変	に	い		飲	に	も
あ	先	知	後	行		端	福	順	し
げ	に	識	は	く	寒	干	は	々	か
る	見	者	や		食		あ	に	り
	た	か	ら	祖	。	秋	る	行	
一	者	や	ぬ	先	秋	夕		く	分
年	が	子		祭	。		元		家
の	男		陸	は	も	元	日	順	の
厄	の	十	郷	男	朝	旦	の	次	者
除	子	五	団	に		が	朝	大	は
の	を	日	遊	け	表	祖	も	本	そ
文	う	月	ひ		で	先	大	表	の
字	ま	迎	す	相	や	祭	体	に	本
を		え	う	を	っ	と	に	行	表
か	十	女	く	女	了	し	し	く	

本表は祖祭にまにあつたとき。礼拝のついで

氷

庚

48

ふ	温	ニ	凍	飯	ヤ	げ	で	い
く	湯	キ	種	の	を	る	る	ま
ら	の	ビ	あ	中	梅		れ	あ
め	中	カ	る	に	の	水	十	る
は	に	ラ		埋	教	神	五	る
葉	つ	の		め	だ	祀	日	厄
ノ	け	中		る	け	り	の	被
月		に			の		夕	い
は	翌	十	豊	凶	紙	食	に	の
雨	日	二	凶	の	の	自	の	す
か	そ	佃	の	占	も	時	子	く
多	の	の	占	い	の	に		下
い	ふ	豆	い		の	オ	男	に
	く	を			を	姓	フ	の
多	ら	は	十	つ	名	シ	子	綿
雨	み	さ	四	つ	を	ま	が	を
で	方	み	日	み	か	澡	た	け
は	を	一	に		い	夫	こ	て
田	見	夜	行	川	了	念	を	そ
か	て	中	行	の		を	あ	れ

5

10

15

✓

て	板	立	ぢ	等	見	に	の	行	よ
い	号		る	か	る	の	せ	う	く
た	に	春		あ		れ	て		お
	は	の	一	木	穀	て	十	灰	来
	る	日	二	ば	類	屋	四	を	
		に	粒	さ	の	振	日	ふ	畑
	今	は	は	れ	つ	の	の	る	作
	は	占	何	か	ふ	上	日	い	は
	や	い	か	よ	か	に	高	で	雨
	ら	文	あ	く	入	お	い	ふ	な
	ず	言	る	お	れ	く	と	る	く
		を		来	て	事	ろ	い	て
	十	か		る	あ	も	に	お	も
	年	い		と	木	あ	つ	と	お
	前	て		占	ば	る	る	し	来
	後	大		う			す	て	る
	ま	内			粟	十		中	
	で			何	粒	五	そ		主
	や	壁		か		日	の	器	人
	っ			ま	来	に	中	に	が

	あ	る	こ	を	神	正	詩	字
	る	と	の	を	正	月	人	の
	。	針	日	焼	月	上	の	上
		で	女	く	亥		詩	手
		も	は	根	の		句	た
		り	針	切	日		う	人
		を	を	虫	は		し	に
		さ	用	を	根	→	い	た
		す	い	鼠	切		。	の
		や	ず	の	虫		家	と
		と	。	日	の		に	。
		よ	鼠	殺	日		行	文
		く	の	す	で		事	句
		似	歯	意	あ		は	は
		て	か	で	る		な	ま
		い	も	あ			い	ま
		る	の	る			。	っ
		か	を			キ		て
		ら	か	食		ビ		い
		で	じ	う		カ		る
				。		ラ		。



鳥	身	よ	一	三	屋	せ	で	作	二
か	は	く	日	月	根	す	今	業	月
出	あ	遊	は	に	や	今	は	は	
て	子	ぶ	終	入	垣	は	大	菜	
か	鳥	各	日	つ	根	女	部	細	
ら	が	戸	休	7	の	も	分	工	
食	出	で	み	播	修	や	菜		
え	る	遊		種	理	る	細	肥	
は	前	ぶ	行		を		工	料	
年	に	二	事		始	以		集	
申	暗	三	は		め	作	以	め	
不	い	下	な		る	り	前	(牛	
吉	内	家	い				は	真	
。	に	で	か		馬	寒	女	等	
餅	会	遊			鈴	食	は	を	
末	事	ぶ	よ		暑	前	菜	道	
	す	集	く		と	後	細	路	
高	子	ま	食		大	よ	工	を	
梁		る	い		麦	り	は	と	
で					は				

祭	一	近	流	つ	分	い	る	飯	
具	<del>家</del>	に	の	る	家	寒	る	も	
の	を	は	家		は	食		餅	
汁	あ	な	だ	祝	本	朝	た	も	
置	て	い	け	文	家	早	へ	作	5
き	て		旧	は	に	く	る	る	
他	あ	附	<u>家</u>	読	行	家	と		
に	る	近		ま	う	で	皮	巾	
用	の	の	家	ず	て	祀	膚	ミ	
い	は	部	廟		ま	祭	か	千	10
ず	こ	落	は	神	つ	し	か	は	
	の	に	こ	位	る		ゆ	た	
木	部	一	の	は		お	く	べ	
の	落	つ	辺	本	五	墓	な	ぬ	
神	で	あ	に	来	代	に	る	事	15
位	五	る	は	あ	<del>邊</del>	ま	と	に	
あ	六		な	る	の	い	い	な	
る	戸	家	い	の	墓	る	わ	つ	
は	あ	廟		は	に		ん	て	
内	る	に	附	上	ま	新	て	い	

る	う	す	す	て	廟	家室 <sup>レ</sup> 灰	少	房	
		ませ	ます	祀	は	で	し	に	
老	部	せ	す	る	な	そ	有	冊	
人	落	て			い	内	力	を	
か	で	飲	一	高		房	場	お	5
租	豚	福	場	い	そ	に	て	象	い
先	ニ	を	合	方	の	祀	作	は	て
の	三	下	に	か	基	る	る	そ	
事	頭	を	多	ら	の	場		う	夫
を	殺		く	順	子	合	式	し	妻
を	し	飲	墓	次	孫	は	は	て	一
を	て	酒	加	に	の	内	一	あ	組
敵	い	す	あ	祀	も	房	家室	る	す
え	た	る	本	る	イ	で	に	つ	
る			は		ほ		あ	そ	仕
の	静	昔		大	同	こ	る	イ	印
も	く	は	そ	体	時	の	時	地	つ
そ	く	豚	れ	一	集	辺	は	は	て
の	に	を	算	日	ま	は	そ	紙	あ
宴	や	用	を	で	つ	大	の	の	る

畑	に	4	三 月	は	そ	寒	福	老	席
ま	全			屋	な	の	食	に	若
び	部	根、		い	時	す	加	皆	
運	野				鋤	す	わ	行	山
び	菜	垣		寒	き	て	る	く	よ
始	の	の		食	返	五 <sub>下</sub>	た		り
め	種	修		に	し	六	け	寒	帰
る	子	理		冷	な	日		食	っ
	を			飯	か	す	時	と	て
四	種	野		食	ら	す	亭	秋	は
月	く	菜		う	種	て	男 <sub>角</sub>	夕	宴
の				事	く	か	は	は	は
中	堆	畑		は		か	男	女	な
頃	肥	の		せ	清	い	男	も	い
ま	も	手		ぬ	明	も	た	行	
で	掘	入			の	大	け	く	子
つ	り				日	豆	で		孫
い	出	三			の	を	あ	女	の
く	て	月			行	播	る	は	男
		中			事	く		飲	は

人	参	小	の	三	代	種	大
に	加	に	節	四	以	の	麦
け	し	人	旬	十	上	收	馬
が	た	か	に	年	の	獲	鈴
参		兩	は	前	墓	期	署
加	今	班	何	ま	祭	に	の
	は		も	で	か	比	播
今	参	二	部	は	あ	才	種
は	加	三	落	は	る	小	
役	し	十	は	花		は	一
員	な	年	全	煎	十	集	年
に	い	前	部	を	年	で	を
も		迄	儒	や	前	あ	通
な	今	は	林	っ	ま	る	じ
ら	は	大	郷	た	で	る	て
ぬ	祭	部	葉		や	年	や
	官	分	に	今	っ	二	や
儒	に	親	登	は	た	回	多
林	な	典	録	上			吃
梨	る	に	こ	已	昔	五	

典經記

け	置	<del>去</del>	で	に	落	官	が	に
が	ま	去	は	書	か	は	な	な
祀	飯	日	親	堂	ら	回	つ	つ
る	を	を	典	か	は	十	た	て
	供	ト	は	あ	祭	名		か
の	之	<del>し</del>	大	つ	官	で	今	ら
こ	鶏	各	ま	た	以	も	の	昔
り	や	戸	は	な	外	行	儒	の
を	酒	で	土	行	は	か	林	人
家	を	主	神	身	書	参	は	は
族	供	婦	祭	で	堂	和	人	は
中	之	が	と	な	契	せ	も	退
で	祀	屏	い	い	に	ぬ	多	出
飲	を	月	う		よ	子	分	し
福	行	を	は		子		儒	た
す	う	立	三	今	昔	い	生	
る		て	月	で	は	こ	で	感
	主	祭	上	は	こ	こ	た	情
こ	婦	祭	旬	こ	の	こ	い	的
の	だ	を	の	こ	部	の		に
				こ	落	部	祭	も

5

10

15

る	屍	畜	あ	三	事	洞	城隍	中	時
城	体	戒	り	人	が	祭		庭	庭
隍	と	は	年	選	選	祭	祭	あ	は
は	見	祭	輩	ぶ	定	物	三	る	河
大	お	官	の	の	と	は	月		辺
き	夫	執	人	は	あ	牛	十		の
た	妻	事	が	は	っ	豚	五		白
木	近	す	た	里	せ	酒	日		砂
そ	よ	子	い	首	ん	末	頃		と
の	ら			は	す		の		赤
下	す	肉	執	年		祭	吉		土
に	当	類	事	輩	祭	官	日		を
壇	日	を	は	だ	官	は	文		ま
を	ほ	食	討	か	は	四	廟		せ
作	は	わ	た	ら	二	五	糺		て
る	沐	す	で		人	日	典		庭
	浴	人	も	字	と	前	の		に
教	も	の	よ	向	執	に	あ		ま
百	す		い	か	事	執	と		く

を	や	単	一	け	め	事	本	る	年
祈	る	に	人	行	。	変	の	が	前
る	。	祭	は	っ	行	前	木	神	に
。	祝	官	行	て	っ	ま		位	植
祭	文	だ	く	集	た	で	神	と	え
官	を	け	。	ま	晤	は	体	し	た
の	よ	か	祭	る	は	そ	の	て	
名	ま	や	物		祀	こ	木	は	そ
だ	。	る	の	す	可	に	か	一	こ
け	一		分	ん	は	行	ッ	本	に
か	年	皆	配	だ	夜	っ	十		は
く	の	は	を	頃	午	て	ン	ソ	人
	豊	衆	う	そ	後	や	十	十	を
他	作	に	け	こ	回	っ	ム	ン	入
人	と	帰	る	に	時	た		カ	木
祈	罪	っ	飲	部	頃		大	ン	ず
願	悪	て	福	落	。	今	低	十	。
は	な	各	は	民	祭	は	松	ム	教
洞	き	戸	簡	各	官	や	ウ	は	本
祭	事	で		戸	だ	う	木	教	あ



書名 朝鮮社会 (55)

原稿番号：# 861-860

号数： 9本

字詰： 字× 行× 段( )

改丁指定：

文撰氏名： 朝日 (箱分) 月 日

植字氏名： (頁<sup>ハミダシ</sup>) 月 日

担当

し	芒	獲	四	は	祭	な	酒	の
せ	種	の	月	非	は	い	。	あ
ね	か	時	大	常	春	。	今	と
ば	こ	と	麻	に	秋	回	は	祭
な	水	同	の	辰	二	人	祀	物
ら	か	程	播	肅	回	祈	の	ま
ぬ	ら	度	種	な	秋	願	人	も
。	十	。	一	も	も	々	あ	っ
高	日	苗	年	り	紀	時	る	て
梁	目	代	中	で	典	も	か	行
	だ	の	の	部	の	音	と	っ
栗	か	準	大	落	あ	戎	う	て
	ら	備	多	中	と	は	か	祀
大	皆	。	忙	で	の	や	分	る
豆	の	田	の	精	去	る	ら	。
	畑	の	時	進	日	。	ぬ	そ
庚	ま	す	。	す	こ	こ	。	水
も	す	き	秋	る	こ	の	境	は
ろ	き	返	の		の	城	紙	鶏
こ	返	し	收		祭	隄	は	

行	は	教	る	金	遊	る	夜	し
く	行	徒	。	の	び	。	も	。
人	く	は	仰	あ	す	苗	寝	小
も		な	馳	る	る	代	れ	豆
あ	祈	い	走	様	日	も	ぬ	綿
る	子		も	舟		し	位	。
	は	お	作	人	に	寺	か	
ミ	あ	寺	ら	の	燈	ま	り	四
口	る	の	ぬ	み	灯	つ		月
う		行		加	を	り	で	
と	お	事	一	や	つ	せ	種	桑
岩	寺	と	般	る	け	ぬ	子	食
に	に	し	に		酒		ま	わ
祈	行	て	は	大	を	行	き	す
る	く	<b>献</b>	何	き	の	事	も	
		燈	も	な	出	と	こ	肥
ミ	祈		せ	舟		し	の	料
口	子	見	ぬ	に	男	て	月	運
う	若	物		皆	だ	は	で	搬
堂	に	に	仏	の	け	舟		。

部	い	下	L	五月	は	の	白	然	に
落		旬			田	な	言	い	石
の	フ	六	植		い	葉	紙	の	か
幼	マ	月				は	を	奇	あ
け	シ	上	畑			あ	か	岩	っ
る	は	旬	の			る	け	か	て
人	あ		除				て	あ	そ
は	る	麦	草			四	来	っ	れ
全		の				月	る	て	に
部	平	刈	蚕			に			祈
出	原	入	の			別	男	そ	る
る	郡	れ	棚			に	は	れ	。
			上			作	よ	に	又
回	安	施	け			っ	く	祈	家
月	治	肥				て	知	る	に
よ	郡		收			食	ら		二
り	に	ワ	蒔			う	ぬ	祭	ヶ
も	郷	レ				ゆ		物	祈
い	土	は	五			馳	祈	は	に
そ	軍	な	月			走	り	飯	自

日	同	し	死	は	名	端	年	加
	い	た	ん	生	節	午	か	し
今		事	だ	ま	は	祀	ら	い
は	休	は	人	た	え	祭	来	
五	日	な	の	者	旦	や	な	田
日	四	い	た	の	端	る	い	植
だ	五		め	遊	午	人	の	の
け	六	祀	の	び		も	で	時
位	の	祭	名	日	寒	あ	ど	は
	三	の	節	と	食	る	う	昔
	日	や		思		や	し	か
菖		り	故	わ	秋	ら	よ	ら
蒲	忙	方	に	れ	夕	ぬ	う	人
を	し	は	端			人	か	夫
用	い	え	午	寒	元	も	と	加
う	人	旦	の	食	旦	あ	思	い
る	は	や	祀	と	と	子	っ	た
事	は	寒	祭	秋	端		て	か
は	四	食	は	夕	午	四	い	
な	五	と	大	は		大	る	今
い	兩							

菖

な	あ	一	男	集	子	せ	て	当
ら	る	等	は	し	宮	ん	一	日
ゴ		二	脚	た	病	い	年	祀
山	そ	等	戦	も	に	て	向	祭
(	の		の	の	よ	の	の	の
ス	時	一	主	は	し	あ	薬	後
フ	は	等	催	特			と	
ボ	賞	牛	は	に	よ	よ	す	ヨ
ン	品	<span style="border: 1px solid red; padding: 2px;">賞</span>	女	効	も	く	る	モ
山	は	<span style="border: 1px solid red; padding: 2px;">賞</span>	は	か	ま	ま		ギ
)	な		グ	多	も	く	お	を
一	い	部	ラ	い	養		キ	採
定		落	ン		母	養	ー	取
し		で	コ		草	母	の	す
て	場	主		今	も	草	毛	る
い	所	催		も	こ	を	が	
る	は	す		各	の	採	サ	か
	こ	る		家	日	集	に	わ
面	の	時		で	に	す	す	か
の	部	も		や	採	る	る	し
主	落			る				
催								
の								

た	部	カ	最	は	海	く	せ	で	時
。	落	ラ	大	沢	軍	な	る	は	は
十	内	ン	行	山	記	る	。	や	○
年	に	コ	事	。	念	。	そ	う	時
来	回	ハ	。	五	日	郡	れ	す	◀▶
は	五	は	見	千	に	で	か	郡	に
競	ヶ	女	物	以	や	や	面	主	選
争	所	。	に	上	る	る	主	権	定
的	造	商	は	も	。	場	権	(郡守)	す
に	っ	戦	女	集	前	合	と	。	。
な	て	と	も	ま	は	は	同	。	一
り	。	同	来	る	端	邑	い	。	定
。	楽	い	る	。	午	内	二	で	。
面	し	形	。	こ	。	で	三	各	せ
ま	み	式	。	れ	。	や	年	面	ず
は	に	。	。	か	。	る	前	で	。
郡	や	十	。	地	時	。	よ	余	最
主	っ	年	。	方	は	今	り	選	近
権	て	前	。	的	見	年	な	を	は
に	い	は	。	な	物	は	。	。	面

また

なるていた。見物は女、男も行く。前から三  
 十代位まで、女もやっていったが、多いのは未  
 婚位。昔から女がブランクを端午にやれば夏  
 に蚊にかまぬと信じられていた。十年來は  
 端午の日に同じ場所では、脚戦とブランクが  
 ある。この二つがこの地方で一番興味を持た  
 れている行楽である。もとは露店も沢山あつ  
 た。売物も娯楽本位。見世物も幾らかあつた。  
 一番大騒ぎの時は端午のこの二つの行事の時  
 である。各家では祀祭を行<sup>い</sup>脚馳走もある。



補

整

六月

整  
獲

女の労働―事変後は女も田に出る。苗取りは

女。前にも苗取りを女かしていた。今はそれ

が。田の除草も女も出た。田も畑も男も

女。手<sup>毎</sup>南<sup>道</sup>のリュウ<sup>イ</sup>ヨ<sup>イ</sup>、コ<sup>イ</sup>サイ<sup>イ</sup>雨<sup>郡</sup>のみでは男

は田、女は畑というのか昔からのまま。地は

区別を昔から。

水田除草。畑の牛耕、~~覆~~土、大麻の収穫調

上旬は麦刈。麦の脱穀調整。馬鈴薯の収

六月十五日流頭には何もせず。祀祭もせ

覆

24-25

24

七月

ぬ。伏遊(ボンノリ)は犬を食う。三伏に。山に

登って集まって犬を食い酒をのんでいた。五

人から十人が山や川辺で食って遊ぶ。この時は歌

ったり踊ったりする。男だけ参加。各家庭で

は何もせぬ。他の人は全部仕事する。別に

日休日ではない。希望者だけが伏遊をする。

初伏の時に犬の汁を熱いうちに食べ汗を流

せば、それがらは汗かおないと信じらぬてい

る

~~汗かおないと信じらぬてい~~

~~汗かおないと信じらぬてい~~



菌

野菜の播種。大豆畑除草。水稻除草。ソバ

も播く。もろこしを食いはじめる。糞肥の

草取り。乾草の草取り。牛の飼料を毎日その

日の分を取って来て食わす。松の枯枝の残り

を見る。松タンの油の材料。小麦を種く。蚕の收

獲。七日の七夕には何もしない。七月に城隍

の別祭。流行病の時など。例祭の時と同じ。

巫女と来ず。休まず。白中。祀祭なし。何も

なし。休まず。即馳走もない。

八月

推肥の草刈り。乾草の草刈り。粟の収穫。

下旬は小麦の播種。稲の収穫も下旬より。柿

の収穫。新はここではきらず。

秋夕。大体寒食に似ている。祀祭、五代まご

の墓祭、十四日、十五日休む。墓の多い人は十

四日から始めるが、一般に十五日だけ。墓祭

の形式は寒食の時と同じ。娯楽は別にない。

餅を作る。市馳走はよくある。夕ルマ月マ迎ムカ也ヤ

る人がある。月を賞するのみ。祭物ハヤ祈りな

し。

九月

小麦の播種。高粱收穫。大豆の收穫。收穫

物の運搬。脱穀は事変前は九月中より十月上

旬にかけて。今は伐ったらすぐその場でやる。

高粱、大豆の脱穀。十月下旬、十一月中旬ま

で、十一月が一番盛んである。秋耕はしてい

ない。忙しいから。すぐ結凍するから。

時亨、城隍祭、袂典がある。この一族で

一番行列の長い人から五代であるから十七代

祝の内八つの墓を祀る。十七代とは行列の一

祖

上旬より下旬まで。

者低くから教えて然り。時亨には宗家は関係

ない。は行列の高い人にずつと廻り。宗

家には事実上帰らない。宗家は普通の家と同

い。宗家の主人は特別の役目なし。宗家の従

割は宗家が部落の代表になる。

時亨の祭官は、山に登った人の中で最年長

者三人が献官になる。祭官はこの三人だけ。

その外に若い二人を執事とする。それが色々

の世話し、祝文もよむ。三人は献官になるだ

けである。

白木

ここの始祖の時亨には三四百名も集ま  
 るし、<sup>小</sup>忙しい時は百人位。他道に行つてた人も  
 十年前には帰つて来た事もある。今はな  
 い。平壤からも時に帰る。この部落に(三部落  
 で)百戸、この面内では他に十数戸。郡内では  
 なし。他郡に約百戸(トウセン郡、カイセン郡)  
 江海道を全して然り。平壤にも二十戸位。(三  
 十年前族譜<sup>譜</sup>作製の頃は四百戸位、それが今で  
 はよく分らなくなつた。

宗契の範囲、時亨にはカイセン郡からや平

壊から代表者が来ていた。今はこない。  
 門契の範囲は全部であるが、内会に参席す  
 る人はこの百戸、セイセン郡の有志位であ  
 る。総計百三十三戸。時亨の祭のあと山で飲  
 福した。以後は牛豚を用いた。そのあとで内  
 会がある。内長の家で行う。内長は最高令者  
 定期の一年一回の集会。祀るのは高い祖先か  
 ら。九月九日朝お登して墓に行く。ニヶ所にか  
 たまっていた。午前に一ヶ所午後に一ヶ所であ  
 る。



十月

收穫籾の運搬、箱の脱穀、供出。籾の供出十

月中旬に終り、雑穀は十一月一杯。綿は九月中、

下旬より十月上旬にかけて綿の供出。漬物。立

冬前後にやる。行事はなし。

十一月

箱脱穀供出十月のつぎ。雑穀の脱穀供出、

十月のつぎ。行事、冬至にお粥を作り祖先

を祀る。小豆の粥。娯楽もなし。仰馳走もな

し。

十二月

農

菓細工、以、純、家具の修理。

十二月一日

を臘ロウ日ニチという。祭はない。豚を殺してそれを食

う。豚油を薬用として保管する。雪の水を保

管パイプする。夏まで。薬用にする。平原郡の海岸

地帯では一年中の水を貯たくわえる。春の事耳。

大海日には寝ない。たがいの箱もない。お窓の

カシカシたつておく。鬼をい入るぬという。

大海日の夜別に食う部部はないが、正月準備の

餅もちを食う。才暮さいぼろを贈くわる。自分の情なさけ宜よろい家

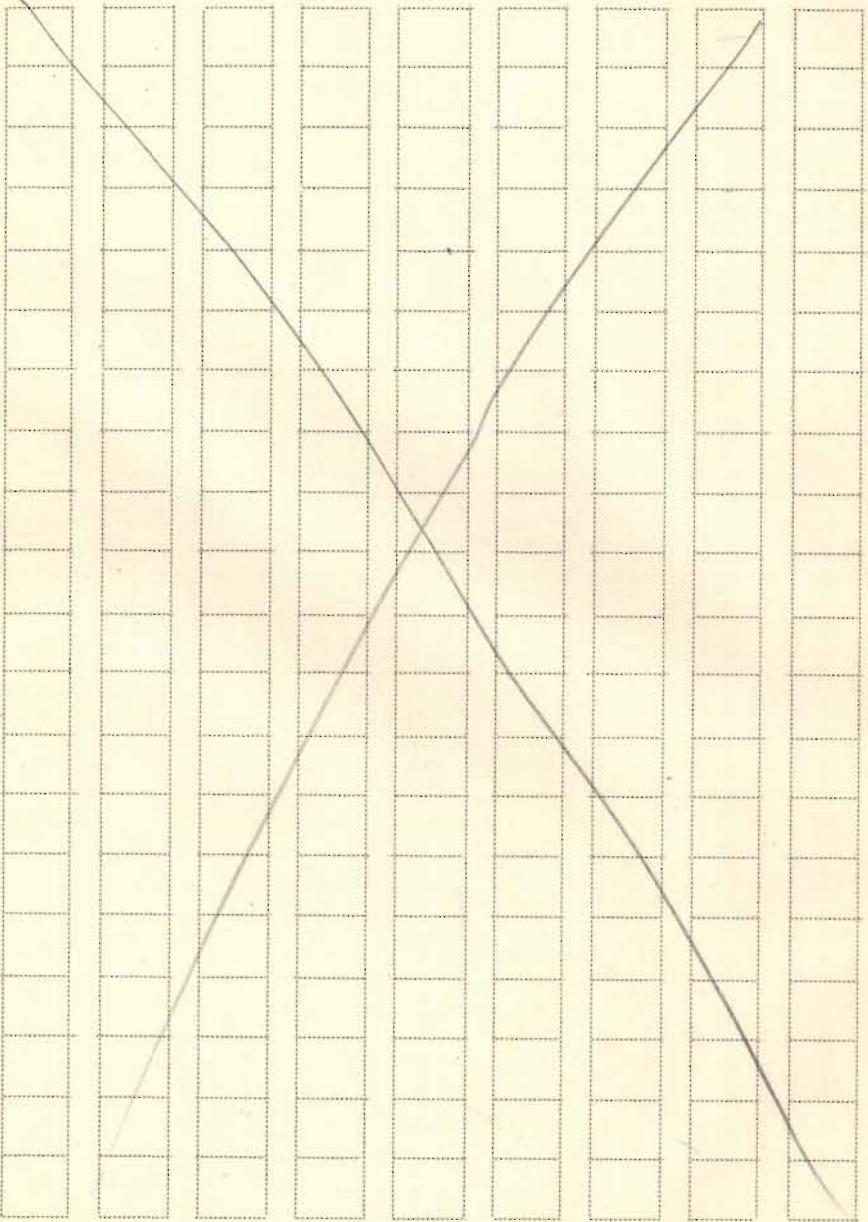
20x10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

No.

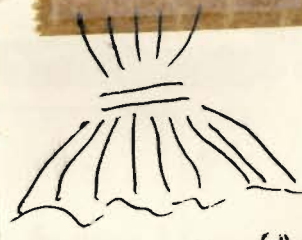
12  
 10  
 8  
 6  
 4  
 2  
 0  
 1  
 2  
 3  
 4  
 5  
 6  
 7  
 8  
 9  
 10  
 11  
 12

110



20 x 10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)



ウチガイヨリ

神造

家宅神

一、土寅トガ之屋敷を守り神。今もある家も

ある。素焼の小カメに穀物や金銭をのせてそ

の上には石のふたをおきその上を更に粟からの

チエチヨリをかぶせる。三月に祀る。地運祭

という。その時家の神は皆祀る。主婦が祀る。

鶏、粟一升、大根、昆布と合せて肴を作る。

夜十時頃祀る。今では一部落に二戸あるかな

いか位。

一、帝親、財産の神。カメに米を一ぱい入

20x10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

カメト別紙②

て時にくさったらとりかえる。その上や横に  
 俵を毎年積み加える。納屋の中においてある。  
 今はやらぬ。今一戸もやらぬ。祀りは地運祭  
 の時、特別にはない。俵を加えるのも地運祭  
 の時にやる。土宮と同じ祭物を膳にのせて祀  
 る。  
 一、  
 千ヨウシ窀窀王は窀の上に祀る。形はない。  
 地運祭の時に祀る。こゝもお膳にのせる。地  
 運祭の事を土神祭ともいう。トサ(土)祀(土)ともい  
 う。

書名 朝鮮社会 (56)

原稿番号：# 861 ~ 866

号数： 9ホ

字詰： 字× 行× 段 ( )

改丁指定：

文撰氏名：朝日 (箱分) 月 日

植字氏名： (頁<sup>ハミ</sup>ダシ) 月 日

担当

一、

三神等を

一、

子を<sup>○</sup>たいため七星祈禱をする人もあ

る。

右の外に<sup>○</sup>

<sup>○</sup>を

科田とは一族会戸で持

ち、族中に科挙に通じた人に收獲をやる田。

科契は若い人が金をおし合つて、土地を買い

て内で科挙に通じた人にやる。やはり同族

の中である。ある内中では今もこれに類する

制があるという事である。内契の一事業とし

てである。

116

20x10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

昭和十一年三月十日

一行入り

明川洞

はついで

流頭

流頭七又白中  
には起る

時享

時享は九月九日  
又は十九日、  
今も盛ん存あり。

踏査

結果

得たる結論

の詳見

明川洞

はついで

一年中

の

時

男

脚

靴

靴

靴

靴

昔

昔

昔

昔

昔

昔

あ

あ

あ

あ

あ

あ

細

細

細

細

細

細

三

三

三

三

三

三

四

四

四

四

四

四

行

行

行

行

行

行

の

の

の

の

の

の





平南昭山町 俣沼南葉藩表

藩海定一一年中一高村人等執業し

日ハ跡午の日の脚上総想かあつた。十

年前ハ印取の行つて大木、十年前

の規模か大とす。面又は郡字位となつた。この

点一に促す。

二二ハ結又ハ結成りし。

二二ハ結成りし。洞

城跡ありし。ありし。

流頭七夕。白甲。船夕。に山。金村の

手

大19.

<p>は 河 守 得 の い と ぬ 南 力 。 一 時 的 強 烈 性 の 北 の</p>	<p>鉛 の 好 難 の あ と に あ る 。 以 て 此 の 強 烈 性 に 行 く 必</p>	<p>取 り に つ て 考 え ら れ る 事 は 、 知 り し て 十 月 十 日 に</p>	<p>と り の お の れ に 行 き ま す 事 は 、 大 抵 の 日</p>	<p>結 論 部 お よ び 西 北 の 山 地 は 、 本 早 く あ る か ら 能 は 多 分</p>	<p>收 獲 運 搬 の 為 に 九 月 は 水 害 に 當 り て あ る</p>	<p>九 月 九 日 に 行 く</p>	<p>こ こ は 同 族 部 落 の 時 を か き 下 す 事 は 、 九</p>
--	--	--	--	--	--	--	--



書名 朝鮮社会 (57)

原稿番号：# 867~887

号数： 9本

字詰： 字× 行× 段 ( )

改丁指定： 改丁

文撰氏名： 朝日 (箱分) 月 日

植字氏名： (頁<sup>ニ</sup>ダシ) 月 日

担当

11  
120

朝鮮民俗採集  
叢書(第10巻)  
9  
9

男女の別と長幼の序

女は男と口を利く事も不良とされてい

ハ九才の女の子に道を尋ねても返事しない

のが田舎では普通である。まして一人前の婦

人は男にばかりを利かぬ。異性に対しては極め

て無愛想なのが善良とされてい。だから百

貨店の女の子などは中以上の家庭ではおさぬ。

女の恥業としては女教員だけがよい恥業と

20x10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

入って来たので、色を失ってとび出したとい  
 袍がそく一人入浴している。南<sup>白</sup>地<sup>本</sup>人の女が<sup>肩</sup>  
 いう話がある。東<sup>〇</sup>温泉で男湯に<sup>朝</sup>山<sup>朝</sup>の男が、  
 内<sup>白</sup>地<sup>本</sup>の銭湯に行つて三助を見て色を<sup>な</sup>ま<sup>し</sup>た。と  
 怒鳴りつけて来た。そうである。半<sup>朝</sup>朝<sup>山</sup>の婦人が  
 女がいるのに水泳して肌を出すとは何事かと  
 泳していたら、野良にいた百姓二人が来て、  
 肌を出さぬ。高山が郡山附近の村の小川で水  
 泳く事を蔑視している。異性の前では絶対に  
 さへている。女は男の前に出ぬのぢやうぢやう、

20x10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

20x10

う事ことがある。以も然と君の話ではもし男女が共に  
 入浴した事が分れば、それだけで村を追い出  
 される位であると。家庭内に於おいても係と母  
 の前でも男は肌を出さぬ。兄妹でも七八才以  
 上になればしかりである。雨班あまづみだけでなく常  
 民においても皆しかりである。歌は女は人前  
 では殆んど絶対に歌わぬ。→家庭内では夫婦が共  
 に食事する事は無い。歌をうたう女は妓生  
 のみおきおかと思われる。他人々別々であ  
 る。兄弟だけは一緒に食う。

和

16

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

茶妓



食事の事

食事

19

110

長幼の序については、他人でも五才の上は  
 兄、十才の上は兄兄文に準ずべしという。朝鮮  
 では年長者程敬威がある。地方では老人はど  
 んな貧しい地位の低い者でも、若い者に対し  
 ては目下に対する言葉を用いる。未婚者は特  
 に軽視される。何事によらず文が子に相談す  
 るおかし種な事はない。父と同席して子は坐する事  
 なく立っている。父おかしは長者の前で、酒下タバ  
 コを用う事なし。おかし眼鏡も用いない。父子

20x10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

食を共にすることなし。

△  
一  
行

弟の嫌悪

大抵五十にならば常民でも幼かぬ。子供に

依頼する。老人で幼くのは子供か可者である。

嫁が来たら主婦も命令するだけで自分も幼か

ぬ。少し金があれば召使いを何人も置く。田

舎で五万圓も持っていては、召使四五人は使

っている。

弟幼くない両親は常民の老人や婦人達は祖

20x10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

No.

先祭や誕生日の祝や名節の行事などを行<sup>い</sup>う。

梨花女<sup>子</sup>の出身者は大抵妻になるとい<sup>う</sup>。

幼かたいでよいからである。女学校に出すの

は、その娘が婦になつた時幼かたいでよいか

らである。女学校まで出てくるのに幼かた<sup>い</sup>よう

な事はしな<sup>い</sup>と考<sup>え</sup>てい<sup>る</sup>。内地人の相当地

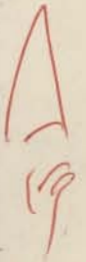
位高い人が女中<sup>を</sup>して主婦か幼く<sup>い</sup>を不思議

に思<sup>つ</sup>てい<sup>る</sup>。朝鮮では下女下男が多い。

20x10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

個人主義傾向



160

家族中の者が集って一家カンランして食事

する様な事は絶対にならない。朝鮮の家庭では、

祖先祭の外に家族一人々々の誕生日の祝が相

当盛大に行われる。即馳走を作り餅を作る。

祭事は何も無い。朝鮮の家には夫婦の組か二

組~~成~~<sup>ある</sup>いは三組もあるが、常民でも夫婦一組毎

に建物(キエ)が別に有る。同じ屋敷内にはある

が別棟である。しかしその夫婦も食事など共

にしちい。男女によって分れ、世代によって

20x10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

また大いに別々でいる。誕生日は男女共に祝う。
   
 ご飯を山もりにして本人に食わす。若芽の汁
   
 も必ず出す。常民農家でもしかり。朝食の時
   
 だけ飯は山もり。昼食、夕食は大体普通。時に
   
 リーメンを用うる。三食共に馳走する。祭事
   
 はない。父や祖父の誕生祝には村の人々も招
   
 く。子供の誕生祝はそれほど盛大にはせぬ。誕生
   
 祝は親孝行の現物の一種で父や母等の誕生
   
 日を祝ってやるのである。父母からこゝとわる
   
 場合も多い。しないでもよいと忠告する場合

20×10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

もよくある。その最盛大のか還暦の祝であ  
 る。招くのは同族近隣老人等と招く。父母が  
 死んで三年忌の内にその還暦の年か来ると盛  
 大に祝つてやる。

△  
 一戸

朝鮮の民家

最も簡単な場合は内房一室で、それに釜の

あるところ即ちポオウがある。内房が更に一

室を増せば、内房が加わる。更に一室加われ

ば中房(カオン)デホンが加わる。総て夫人がいる

20x10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

110

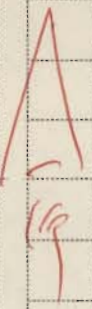
ところが内房である。原則的にいえば朝鮮の  
 家は内房と外房ハカハシ(倉廊と同義)の二部よ  
 りなる。貧しい者には外房はない。外房は男  
 子の居室、応接室である。内房と外房は棟を  
 異にする。内房の棟はアチエ(内房の建物)  
 とサランチエ(倉廊の建物)に別れる。内房外房  
 の外に召使の住居のために大内の横などに室  
 がある事がある。それをハンタンハンという。  
 板敷の一室が内房にある事がある。祭の時や  
 夏涼むために用いられる。大廳(大廳)という。廊下

20×10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

といいうよりもキャンセルの~~様~~<sup>よう</sup>な役をするもの  
 にマールというのがある。マールの狭いもので  
~~地本の~~濡れ縁に相当するものにトエマールという  
 のもある。堂は家族の~~誰~~<sup>誰か</sup>の堂である。全  
 家族の共同のものはない。内庭はいわば通路  
 である。庭園が堯達しない理由であろう。日  
 本の庭園は家族中のものである。

被雇人



年期被雇人  
 田イルム、大抵一年期  
 冬

20x10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

また



農

は春の耕作、頃から秋の収穫終るまで。三

四十迄の<sup>まで</sup>独身者、割合多い。家を持たぬ。貧

家の子<sup>また</sup>は外來者。村の青年宿サランに泊る。

青年宿は常民の家のカラン。成<sup>あ</sup>る程度富裕の

家。宿泊料はやくぬ。青年宿の常民は自身で

イルクムを持ち、それをサ<sup>ら</sup>ンに泊している

ので、村の他のイルクムもそこに一緒に来て

寝るといふ風である。朝<sup>報</sup>は何も無い。イル

クムは食事は主人の家で食う。一年幼いて以

前は五十円、今は百三十<sup>円</sup>。雨の日

20x10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

No.

などは ~~昔~~ 青年宿に来てころかり飯だけは主  
 人の家に行つてたべる。村に自家がある場合  
 にも、食事にも寝にも行かぬ。自分の家には  
 夕食後など行く時もある。甲の家に一年、来  
 月は乙の家にという風で、同一の主人の家に  
 何年もつとめる事は余りない。老年まで独身  
 の者もよくある。五十戸の部落にそんな独身  
 者二十以上ののは五六人はいる。五十戸に兩班  
 は一、二戸。主人は春と夏に服を一着ずつ ~~着~~ 与え  
 る。一年に二三着やるが ~~俵~~ 例である。洗濯も主

20x10

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

No. ....

人の家でやる。常民の主人は自家にとめる。  
 大きな農家にはイルクムが三、三人いる。妻帯  
 者のイルクムもいる。  
 住みこみの下男用千ヨング *Cheng* は農事は殆  
 どせず。農期（繁）には農事もする。妻帯で、夫妻  
 で下女下男の場合が多い。下男は下人（ハイン）  
 下女はハーニヤという。下女下男の住む所を  
 ハンナンガチエという。ハンナンガとは下男  
 の意。大抵大内の横にある。食物は主家から  
 三度共合けて貰う。主人の家から別に附近に

No. ....

のみ、小さな市は農村部落にも少しはある。  
 場は郡庁所在地以外にはなかった。市場も邑  
 邑と邑内は同様。郡には邑は唯一つ。昔は町  
 い。いるのは層級も必要を邑などにはみある。  
 民の一種である。普通の部落には賤民はいな  
 ンナンは昔は世襲的に主家につかえた。常  
 してつかえる。子供も主人の子等と遊ぶ。ハ  
 人の家で食事はとる場合が多い。妻は下女と  
 に来る。小作地を与えてある場合もある。主  
 家をもちたしてある。ハンナにもある。毎日主家

No. ....

朝鮮の豆撒き

やる場合もある。

春窮期から契約する時もあるが、二三日前に

貧農に限った事はない。対等の関係である。

雇は村の手のあまった人が誰でもなる。

の一種、小守女

雑用人、下女の一種、大抵一人者、ハニ

の設置がある。邑には常に市場はある。

町場として発達したのには邑のみ。邑には市場

No. ....

朝鮮の  
小正月

△  
一  
▽

ポルムという。

この行事の事もポルムという。十五日の事も

という。トイウイとは暑気あたりの意である。

その時トイウイとデキモノ(腫物)をもつて行け

これ等の実の穀をはいで、戸外になげすてる。

十四日の夜~~ある~~いは十五日の早朝に子供等が、

ある。これを総稱してポルムという。旧正月

こゝでは豆ではなく、クルミ、栗、松の実で

△  
▽

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

No. ....

十四日の夜に夕食に(チヤコウハブ)雑穀飯(雑穀飯)を食う。一家中  
 で食う。何かの厄祓(ウラハ)いである。雑穀飯には米  
 の外に雑穀と名のつくものは皆入れる。粟、  
 大豆、キビ、緑豆、小豆、(麦は余り入れぬ)等  
 を入れる。お菜には山菜のありたけを入れる。  
 九種か十二種のものを入れる。この菜の事をイソといふ。  
 山菜には干カボチャ、大根の葉(葉)の干したものを  
 ワラビ、トラヂ、大根、モヤシ、その他を入  
 れる。出来るだけ数が多いがの返(返)りとなる。  
 最小限度九まは十二種。

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

(編者記 | 7 この菜のこを○○○Lは十

ムルかもしれぬ。原稿欄外に次の記入あり。

7 十ルルには二種ある。春の青い山菜は70ン

十ムルという。ヨモギ、メ、ネンイ、千ルゲ

ニイ、セリ。他の一種は干した保存にたえう

るもの。そは十ムルという。大豆のモヤシ

はコニ十ムルという。緑豆のモヤシはシユク

千エ十ムルという。切干大根も十ムルの一種

。 L



No. ....

中ボウ

一斤

タンパイ

コンクルとフクンと満洲の難派  
 タイハイは今悪い意味で問題になったり。  
 旧屯で納税の内にタンパイをとる。漢代かろ  
 あるという。金で困る人を屯で援助する。タ  
 ンパイの徴集、支配等に不正もあるのが問題  
 である。困る場合の徴用、徴発(病氣や死亡  
 などない)屯の奉養(修膳費)、人件費(しかり)。  
 会費と私費と混用。役人の招待費。屯費とも  
 考えられる。宴会費等もある。屯費としては  
 タンパイの外にない。最近では行政の単位でタ

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)



書名 朝鮮社会 (58)

原稿番号：# 888 ~ 895

号数： 9本

字詰： 字× 行× 段( )

改訂指定： 改訂

文撰氏名：朝日 (箱分) 月 日

植字氏名： (頁<sup>ミ</sup>ダシ) 月 日

担当







書名 朝鮮社会 (59)

原稿番号：# 824-902

号数： 9ホ

字詰： 字× 行× 段( )

改丁指定： 24ホ

文撰氏名：朝日 (箱分) 月 日

植字氏名： (頁<sup>ハミ</sup>ダシ) 月 日

担当

2頁

朝鮮

3下  
付朝鮮農村部落調査項目

行政的地域集團、官設的集團

旧洞里の決定

行政的區画分令の丁足

旧面の社会的統一性

旧面の行政組織

行

2 洞祭、その他の信仰対象

祭神 □ □ 私 ○ □ 起原

洞祭、(時、準備、祭官、費用、祭典の模

様、付近部落に於ける事情)

その他の信仰対象

呪術者

行

3 契(殖産契)、産業組合、金融組合、小

組合(洞契)

部落内各戸(番号による)の各種の契、

殖産契、産組、金融組合に加入の重複的

係の具体的事実の調査決定



各種の契につき組織事業財産、創立年及  
 近〇殖産契、産祖、洞契について  
 石  
 〇同じ

四〇御約

兩班門中〇数〇戸数〇儒林団の組織  
 儒生数、文廟、御〇〇社〇  
 〇御約の現状  
 〇德行柏勵の宗行（御約藉）

遺失相現の宗行（四訓則の所行）

礼俗柏友の宗行（年始礼、結婚の祝、  
 八十老寿祝、弔慰）

患難柏恤の宗行（水害火災の扶助、疾  
 病、孤遺、貧困、死葬の社、御約

契の現状（御約契の四単位組織、二

洞里一〇の如きもの）

洞里契（他の契と御約の関係（儒林の加

入及び指導の事情、儒林の社会的地位

の現状、儒林団の事業、明党関係、御

10月

約籍、御約会

一行了

89

五、宗中及以洞内の性別

洞内の同族別の社会的成層及び社会構成

洞会、他の位、自作小作関係

洞内の同族別居住形式

宗中組織

宗家、門長、有司、内会、宗会

宗約、宗約所、宗約、宗憲、宗

中財産、宗山、宗土、位土、宗田、宗

苗、祭仕田、墓田、田、有苗、義

庄

宗中事業

祖先の祭祀、時享、大祭、茶祭

小祭、忌祭

勤農、教育、風習教養、納税

大同宗契、郡内、宗族契、各宗派

門契、部落内、名称不定

一行了

廟

○の家廟（祖先四代を祀り祠堂）

別廟（五代以上の祖先を祀る場合、別

に一室を建つ）

祠院（園または土林の建設）

書院（土林の建設）

青年男女関係の実際如何

行？

儒林の部内組織、宗中の部内組織

行？

84

六 洞会、共同祈願、村仕事、部落有財産

村ハチダ、洞約

・洞会の組織・会合・事業、洞会の年中

行事、

○ 洞会と洞契・洞祭、共同祈願と村仕

事との関係

洞約の組織事業、村ハチダの今昔

・共同祈願・村仕事の集団組織及び実践

事項

・部落有財産の品目、偏格、維持形式

七、生業

各戸職業別調べ

非農業家族の生業及び生活（特に飲食

店と全戸の割合）

地主・自作の作別調べ・小作料、各戸

経営地面積反当収量、経営費（肥料

）

反当地価

男女老若別労働事情

生活費

八、労働

ワレ、ワレの役員、開始より解散までの経過

ワレ、ワレを行なう労働の種類、人数

ワレ、ワレと多ハ、ワレにワレ詳述

ワレ、ワレと血縁・地縁関係、階級、

ワレ、力量、性別等の関係。

ワレ、ワレにおける交換の形式（人カと

畜力、男と女、労働と金銭等の関

係）

丸  
 近隣集団  
 〽 五家〇の遺制の〇〇  
 〽 婚・葬・産・病・火事は不けり相互扶  
 助形式  
 〽 土産の分配  
 〽 貸借  
 〽 招宴  
 〽 援助・庇護・協力

26 見出し

8年

一行了

小見出し

十一の家族及び分家、来住、住住

84

村中での娯楽

→ 行 った

① 家の世代数、分家の時の分配、婦はこ  
このう 来たか、何年か

② 家族員にし ③ 村外にある者の居住地  
現職等

④ 家族員数最大のもの

⑤ 家族内の総柄

小見出し

十 集会及び会宴及び娯楽

84

→ 行 った

各別につき詳述

① 会合の首長

② 座席・費用の負担、男女老若別の会合。

③ 家を単位とする場合と個人を単位とする場合

④ 娯楽

⑤ 娯楽

⑥ 結婚前男子、女子の(春夏秋冬)

⑦ 男の娯楽、女の娯楽、老人の娯楽

お見出し

十二 年中行事

84

月：よみの作製

等につま

一行アキ

春夏秋冬の一日の家族生活

誕生の祝と祖生の祭

一行アキ

十三

通婚圏

市場関係(売買圏)

84

(気象、生業、祭祀、娯楽、会合)

結婚年令

結婚式及びその前日

私生児ならびに〇〇い

東住者の数及び〇取扱、住住の( ) ( )

賦産

家屋の構造

家室の利用事情

家計調査 家族労働力

一行アキ

行商人、孤立商店、商店群、町の  
 利用  
 旅行の機会（年平均の村民の）

①

① 面と郡の社会性  
 ② 通婚圏の決定  
 通婚圏と郡面洞の関係  
 階級的内婚の関係  
 特定部落への通婚  
 同族団相互間の通婚に下ける多い  
 ものと少ないもの  
 古来御約を組みし他部落ありや  
 ③ 市場関係の決定  
 市場利用の定情